将来豊かなコミュニケーションができるための基礎的な表現の育成を目指して

三田　耕平
英語科　端崎　圭一
小川　正清

1．テーマ設定に当たって

昨年度の英語科の研究（発達段階に応じた意欲や表現力を高めるための授業の工夫）において，本校の生徒は「学年が上がるに従って，自分の身近なことからより広い範囲の複雑な物事について，表現するようになる」という傾向を持つことが分かってきた。話す活動をする場合の題材選びのときも，初期段階は身近で話しやすいものを，それから徐々に世界を広げていくように題材を与え，より多様な表現を伴うものにしていきたいと考えた。また，アンケートの結果から，人前で話す活動には多くの生徒が抵抗を感じており，意欲も低いことがうかがえた。そこで，いきなり全体の前で発表させるのではなく，ペア，小グループと段階的に発表の機会を持たせることによって，人前で話すことに慣れていったり，恥ずかしさを少しずつ克服していけるようにしたりして，心理的な負担を減らすことを試みた。

「意欲が低い」と見えていた生徒であるが，いろいろな形で話す表現活動を始めてみると，明るく積極的に話している姿が見られ，単に「意欲が低い」のではなく，人前で話すことに大きな抵抗感を持っていることが明らかになってきた。むしろ，活動を始める前は，「意欲が低い」と見えるが，ひとたび活動を始めると，生徒は学習した内容や過去の発表の体験を駆使し，さらによいものを発表しようとして，意欲的に活動するという姿も見えてきており，それは学年が上がるに従って顕著であった。

今年度，本校では，全教科で「問題解決力」を取り扱うこととなった。英語科では，今年度も継続して［確かな学力］の中の「表現力」を「問題解決力」の一部の力ととらえて，研究を進めることにした。（「表現力」については，これまでも継続して取り上げてきている。）昨年度の研究テーマである「発達段階」と，今年度のテーマである「問題解決力」を合わせて考え，今年度の英語科では，以下の３つを柱にして授業を進めていくことにした。

A　スモール・トークのような瞬間的・即興的なやりとり。その場で瞬間的に考え，対話する活動。

B　自己紹介スピーチのような長い時間をかけて計画的に行うもの。書いて準備し，覚えて，スピーチとして発表する活動。

C　電話，道案内，飛行機の会話など，ある程度パターンが決まっている会話を発表する活動。

Aの題材は，これまでも２年生後半から３年生に扱ってきたものであるが，あるテーマを与えられ，それについて，２人が１～２分間，話を続けていくという活動である。このような場面は，将来何らかの形で，生徒の前に起こることが予想され，会話を進めていくこと自体が問題解決となる。この活動の中で，生徒はそれまで学習してきた様々な能力を駆使してコミュニケーションを続けなければならず，難しい課題であると思われる。

Bについては，各学年で年に数回取り扱っているが，それまで学習した知識を使って，いかに自分の言いたいことを書いたり，話したりするかということが問題解決となる。答えや新しい表現を教師が教える，英語的発想（感覚）に至るようなヒントを日本語で出す，友達と一緒に考える，といった活動を通して，今まで言えなかったことを，何とか英語で表現していく力が必要となってくる。

Cについては，単に決まった表現を話すにとどまらず，ちょっとした問題を起こして，生徒にその問題を英語を使って何とか切り抜けさせる活動が問題解決となる。

上の３つの活動を各学年で，どのように行っていくのが効果的か，発達段階を見据えて研究を進めてきた。各学年の実践の項で，詳しく述べていきたい。

２．小学校との連携

附属小学校の「英語」に関わる動きは今年度で10年目を迎える。しかし，小学校と中学校の英語担当の教員は，これまで親密な交流をとってきたとは言いがたい。小中連携を見据えた連続した英語教育の実現に向け，動き出したばかりの状態である。ここでは，2002・2003（平成14・15）年度に行なわれた小中英語部会の活動と2004・2005（平成16・17）年度の授業参観の取り組みについて述べてみたい。

(1) 小中英語部会

前に述べたように，小中連携を見据え，その準備段階として，これまで別々に活動をしてきた小学校と中学校の英語に関わる教員が，先ず先陣を切って活動を始めることとなり，2002（平成14）年度に小中英語部会（仮称）を発足し，2003（平成15）年度には「小中連携カリキュラム開発研究会　英語部会」として活動した。

意見・情報を交換する場を設定することから始め，年数回の会を持ったが，最初に，年間指導計画を交換し，小学校の英語活動のねらいについての理解を深めた。小学校では英語を総合学習の中の「英語活動」として扱い，「聞く・話す」を中心にまわりにいる人々とのコミュニケーションを活性化するための活動，すなわちコミュニケーション活動として英語を位置づけており，また，「英語活動」を中学校での必修教科のような評価の対象とはしていないということであった。

次に，相互に授業参観をし，参観レポートを交換した。小学校の授業では，中学校の目標である「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」取り組みが多く見られた。また，小学校教員には，中学校の教科書を使った授業や高校入試への準備を含めた学習の取り組みが印象に残ったようである。参観レポートの中には，中学校側からの「聞く活動・話す活動を中心に楽しくやれる小学校はうらやましい」という思い，小学校側からの「小学校でせっかく培ったコミュニケーション能力を中学校でもきちんと継続してほしい」という思いも読み取れた。授業参観では，活動や指導法などに関する類似点と差異点からも互いに発見があった。一例を挙げれば，参観した小学校の授業では机や椅子の置かれていない特別教室を英語活動に当てており，リズムや歌に合わせて身体を動かしたり，それぞれがたくさん動き回ったりしながら，学習を進める場面が多く見られた，中学校では逆に机と椅子で勉強する座学の形をとることが多いことである。発達段階を見て，中学校の初期段階では２つの学習形態をうまく使い分けて学習を進めることなどが考えられる。

小学校英語と中学校英語の「連携」とは何かを考える場合，先ず今，目の前にいる生徒（その多くが小学校での「英語活動」を経験してきている）に，どのように教えていけばよいかを考えなければならない。そして，将来的には，小中学校のカリキュラムを一貫したものにしていかなければならない。これまでが「小学校で学習した内容を，中学校でもう一度最初から学習し直す」状態だったとするなら，「小学校で学習した内容を発展させたり，深めたりする学習」が中学校に必要となってくる。小中英語部会では，お互いの年間指導計画から，中学校で学習する英語の表現を小学校のどの段階で学習してきたかを，表にまとめた。小学校６年間の中で，中学校１・２年で学習する言語材料をほぼ扱うという結果であった。また一部，中学校では扱わない語や言語材料も小学校では扱うことがわかった。中学校では今後，小学校で学習した内容をどれだけ身に付けているかを確かめることも必要となっ

てくるであろう。

2年間の小中英語部会の取り組みでは，各学校でなされている学習活動を一本の流れにし，連続した義務教育9年間のカリキュラムを作り上げていくまでには至らなかった。しかし，2004（平成16）年度の金沢市英語特区指定を機に，小学校でも，「英語活動」から，独自の「英語」の取り組みが新しく始まり，必修教科である「英語科」に一歩近づいた。中学校英語科としても，いよいよ連携のために本格的な準備を始める好機が訪れたと思っている。

(2) 小学校の授業参観

本校英語科では，昨年度から今年度にかけて，小学校の協力を得て小学校の授業参観を5回行い，児童の学習の様子を中心に観察し，感想や考察をまとめた。参観日と参観クラスは以下の通りである。いずれの授業についても，学級担任とALTとのティームティーチングで進められていた。

2004(平成16)年度　①2005(平成17)年2月18日　6年2組
　　②2005(平成17)年2月25日　6年3組
2005(平成17)年度　③2005(平成17)年6月10日　6年2組
　　④2005(平成17)年6月17日　2年1組
　　⑤2005(平成17)年6月24日　6年2組

ア ①，②の授業参観

参観日，参観クラス，使用された主な言語材料は以下の通りである。

①2005(平成17)年2月18日　6年2組 “What do they eat with in Japan?” “Chopsticks.”
②2005(平成17)年2月25日　6年3組 “What class do you have on Friday, 1st period?” “Japanese.”

①，②の授業で参観した2クラスの児童は，現在の中学1年生の生徒（の一部）で，6年生の最終時期，中学入学を間近にした児童である。①，②の授業で感じたことを中学校の4観点別に以下にまとめてみる。

A　コミュニケーションへの関心・意欲・態度

授業前に行われた4人の児童が黒板に英語の表現を書き，他の児童が意味を当てる自主的な活動では，間違いを恐れず楽しむ様子，英語への素直な興味が感じられた。教師の力を借りずに積極的に活動していて，意識・関心の高さが伺えた。また，よく挙手をし，夏休み前の中1生徒の様子と非常に似ている。3学期の中1生徒の挙手の様子と比較すると大きな差がある。

授業の終わりまで，様々なバージョンで一つのパターンの文を繰り返し練習したが，飽きることなく参加していた。単純な繰り返し練習に嬉々として取り組む様子は，中1生徒の早口言葉の練習場面と似ていた。中2の段階では，このような活動は無理なのではないかと感じた。

一方，全ての児童が大きな声で自信たっぷりに発音しているわけではなく，数人の自信のある児童が大きな声を出して，全体を引っ張っていた。中1～3生徒でも同様である。②は全体的な雰囲気は良いが，元気がない，元気をもて余して注意力が散漫，口が開かないなどの雰囲気もある。

罰ゲームで「なんでこんな人前で恥なんか…」の声に，ALTが“Don't worry!”と励ます大事な場面があった。中2生徒では，この「恥をかく」ことをひどく嫌うようになると思う。

②の言語活動では，何もしない児童はいなかった。しかし，活動のやり方がわからず，ペアの

女子にどうするかを教えてもらっている男子が多く見られた。また，英語のやりとりで情報を得る活動なのに，相手のワークシートを書き写すだけになってしまっている児童もいた。中学校でも，目的意識をしっかり持たせないまま活動をさせると，このような行動が見られることがある。

B　表現の能力

クイズとして児童が黒板に書いた文字は大文字や小文字が入り混じっていたが，特に誰も気にとめている様子はなかった。文字を示すと，それを見て話そうとする傾向は，中学生と同じように観察できた。また，単語（教科名）をつづることには，苦心しており，かなり時間がかかっていた。

C　理解の能力

児童が理解しているClassroom Englishは，中学校教諭が思っている以上かもしれない。しかし，発展的な質問に応えられるのは一部で，他は多少戸惑っている場面もあった。児童の学力差の開きを感じた。

D　言語や文化についての知識・理解

曜日については，多くの生徒がしっかりと発音できており，定着している。一方，先週やったはずのことを多くの児童が忘れている様子も見られた。小学校での英語教育の難しさを感じた。復習を当てにできないので，「教えたことを飽きずに何度も繰り返すこと」の必要性が中学校以上にあると感じた。

教師の質問に対し，文法用語を使って答えるなど，塾等での学習の影響が感じられる発言があり，学力差が心配であった。

E　その他

男女のペアはスムーズに組めていた。躊躇したり嫌がっていたりする生徒はいなかった。

中学校では１人１人の発表など目立つ場面があるが，小学校では１人１人はそれほど目立つ授業ではない。負担は少ないが，集中していなくても，授業は進む。意欲次第で，大きな差を生むのではないか。

③，⑤は，道案内の表現を数時間に渡って扱った授業である。新学年になってから２カ月の６年初期の同一クラスの授業を参観した。③は教室，⑤は体育館に作られた大きな迷路を使っての授業である。

参観日，参観クラス，使用された主な言語材料は以下の通りである。

③2005(平成17)年６月10日　６年２組　Where is the library?　Between the park and the post office.

⑤2005(平成17)年６月24日　６年２組　Go straight.　Turn right.　Turn left.

イ　③の授業参観

③の授業から感じたことをまとめてみる。

A　コミュニケーションへの関心・意欲・態度

①，②の６年生より元気があり，集中力があるように思われた。これを，学年集団の特徴と捉えるのか，学年最初と学年末での発達段階の変化と捉えるのか考えさせられた。他にも，ほとんどの児童がしっかりALTの方を見ている，同じ事を少し多めに繰り返しても飽きずに取り組む，

みんなで声をそろえて元気に返答したり，リピートできている，文字を何度も繰り返させるシンプルな活動でも，笑顔が多く見え，楽しく取り組んでいる，空欄に「どんな文字がはいるのだろう？」という生き生きした表情が終わりまで続く，などの意欲的な様子が多く見られた。

教師が短時間で次々と活動を変化さたり，活動にゲーム的な要素を盛り込むことで，児童も楽しく活動できていた。中学校１・２年にも有効だと感じた。

B　表現の能力

turnのあいまい音など，児童の発音がよくて感心した。低学年から英語に取り組んでいる成果を見たような気がする。早口言葉では，英語のリズムに合わせて身体や頭を動かしながら，言っている児童がいた。How are you? の質問に対し，各自ばらばらの返事もよくできている。

Is your favorite color ～? の文を繰り返して聞いていた児童が多い中，Is your favorite color blue? Orange? Red? と聞いていた児童がいた。自然な会話で，Red?も上がり調子で言えていた。

Yes, I am. / No, I'm not.の文字を黒板に貼り，文字として意識的に生徒に提示してあった。「文字を見せる」から今後の「文字を書かせる」への移行時期について気になった。Is your favorite color red? の質問に対してYes, I am.と答えた児童がいたが，黒板に貼られた文字に引きずられたようである。中学校でもよく見られる誤りであるが，現段階の小学校週１時間の授業の中で，しかも，文法構造を教えない状況では，児童がどこまで習得できるのか，限界を見た気がする。

児童本人に本当に好きな色を言わせるところまではさせず，練習として教師の示した色を一斉に答えさせていた。中学では，自分の好きな色を言わせたり，さらに発展させて，インタビューでの好きな色のランキングを調べさせるところであるが，時間の関係か…。

C　理解の能力

Who is first?などの英語に即座に反応したり，Make pairs.など必要な指示をすぐに行動に移せていた。

一度に12個の単語を扱うことは，中学校でも多いと感じるが，身近なカタカナ英語が含まれており，児童には十分理解できていた。教師は，left and rightを最低限の日本語で確認した。slow learnerには必要なことだと感じた。

D　言語や文化についての知識・理解

Today is... Tomorrow is... 毎時間の繰り返しで，児童に日付がしっかり定着している様子だった。BやVの音の区別も同様。ALTが唇の形を見せてLやFの音を当てさせたのが新鮮だった。児童もすぐに当て，積み重ねが大切だと思わされた。

E その他

授業形態は６班６列で床に座り，　教科書や机がなく，いつでも身体を自由に動かすことができる。身体を使って４つの方向を何度も理解させる場面など，発達段階を考えると，道案内の活動は，小学校で行うのがふさわしいと感じた。参加の姿勢も全員よかった。中学校ではもう少し複雑な活動にしていく必要がある。中学校も１年生くらいまでは使えると感じた。

ALTを拍手で迎えたり，最後に教具を児童がALTに手渡したりする姿勢が新鮮だった。

目標の文の導入では，下のように，児童の知識を引き出して，さりげなく行っていた。１文だけしか扱わないので，小学校ではこれで十分なのだろう。中学校では，言語の使用場面や機能を

取り入れる必要があるところが大きく異なると感じた。

T:「Where」はどんな意味？　S:「どこへ」

また，下のような対話の中で，児童からGo left.が出たが，この場面が，言語を学ぶ上で重要なポイントだと感じた。また，Go straight.については，以前の学年で学習済みなのかすぐに出てきた。学習成果がよく見られた。

T:「左に曲がって」は英語で？　S: Go left...　T: Turn left.

ウ　⑤の授業参観

続いて，体育館の大きな迷路を使って行われた⑤の授業について感じたことをまとめてみた。

A　コミュニケーションへの関心・意欲・態度

広々とした体育館で，児童がいつもにも増して伸び伸びと活動しているように感じた。一方で，研究授業ということで，多くの先生の前でナーバスな表情を見せる児童も見られた。

B　表現の能力

Say that again.を初めて読ませたとき，かなり読める生徒がいることに驚いた。しかし全く読めない様子の生徒もいるようで，学力差を感じる場面であった。that againのtとaのつながりの音やtで舌をはじくような音までは，上手にrepeatできていない様子だった。that againは別々に発音している児童が多い。しかし，Say that again. は多くの児童がすぐに自信をもって読めるようになっていた。

目隠しをしたパートナーに指示を出しながら迷路を進ませる活動で，他の児童とぶつかりそうになった時に慌てて，Stop!と指示できていた。Go straight. も上手に使えていたが，Turn right / left.の指示では，rightとleftを間違えてしまう児童が見られた。斜めを向かせたり，戻ったり，危ない！という指示を出したそうだった。中学校では，必要な時はこのような表現を教えてもよいかと思う。

C　理解の能力

前回までは絵を用いて場所の名前を練習したが，今回は文字での復習だった。児童の発達段階を考慮して，絵から文字へと活動を発展させていた。

ホワイトボード上のカードを使って，The school <u>is next to</u> the police station. The police station <u>is between</u> the school and the park. The school <u>is across from</u> the park. を口頭で示した。この活動を見て驚くのは，この発達段階の児童でも，定型文であれば十分理解していると思われるところである。もちろん，表現できるようになるのは，別問題である。それでも，ある程度の数の児童は，だいたい声をそろえてこれらの表現をrepeatできていた。

楽しそうに行っている様子の中で，M君については気になった。以前も，表情は明るいものの，間違いが多かった。指示の英語そのものがわからないのか，それとも，その児童の資質なのかは２時間程度では判断できないが，中学校でいうミクロ的な発達段階では，他の児童より下位の段階あるように感じた。

D　言語や文化についての知識・理解

ハングマンの途中で，文全体を考えさせる場面があり，児童もthatとagainから( )ayに入る文字を考えていた。way, kay, sayとありそうな単語を次々に出していた。すぐにはsayと出てこないところが６年生らしいと感じた。sayという語を全く知らない，thatとagainの意味や全

体としてどういう意味なのかが分からないものと思われる。

E　その他

授業でよくやっているハングマンでは，類推するものを語単位から文単位に変更してあり，その後の活動につなげる授業の仕掛けになっていることに感心した。命令文であるが，自然な形での導入であり，このようなタイミングが重要だと思う。

学級担任がゆっくりと日本語で迷路のやり方を説明された。その際，聞いている児童の目はきらきらと輝き，後ろにいる生徒は自然に立ち上がって説明を聞いていた。ALTとの例示も適切であったと思う。活動は，英語使用の必然性を考えられた活動であった。

同じ迷路を使うのではなく，途中で「行き止まり」を作ることで道を変えておられた。中学校でも道案内の活動で，地図の上の「ある道」を突然「通行止め」にして応用力を高める工夫をする。答えを覚えればできる活動ではなく，問題解決力（＝確かな学力の一部）を育成する上で重要な要素であると思う。

体育館に用意された大迷路は，英語を自然に使わせるよい機会を提供していたと思う。２分以内に，目的地に到着させるという目標も，児童にやる気を出させていたと思う。

エ　④の授業参観

最後に④の授業参観をしての感想をまとめてみたい。ア～ウは全て６年生の授業を参観したが唯一の低学年，２年生の春の授業である。

A　コミュニケーションへの関心・意欲・態度

先週参観した６年生と比べると当然ながら「子どもっぽい」と感じた。反応が素直である反面，時に雑然とした雰囲気にもなると感じた。果物の名前を言う役目として，黒板前に２～３人の児童が出てきたが，積極的で元気な姿を見ることができた。まだ，あまり間違いを恐れない発達段階なのだろう。手をたたきながら，全員でゲームを楽しく行っている様子が伺えた。活動時間がもう少し長くてもいいのになと感じた。リズムや歌を使った言語活動では，その声の大きさや夢中にまた楽しそうに活動している様子に最初はとても驚いた。小学校２年生の発達段階に合った活動であると考えられる。

B　表現の能力

活動中，ほとんどの子どもが文を用いて話しているのだが，カードの交換に意識が取られる子は，単語レベルでの活動になっていた。中学校でもこの種の情報交換の活動はよく行うが，上手に目的意識を持たせないと，ひどい場合は，日本語で行っている場面も見られる。この種の活動の難しさを客観的に見た思いである。

友達と話し終わった後にBye.やThank you.の声が聞かれた。また，授業最後の振り返りの司会をした児童は，Comment, please. Anyone else? ～(さん), please. Thank you.などの英語を使って司会をしていた。

C　理解の能力

How do you say ～ in Japanese?と子どもにたずねる場面が何回かあった。

D　言語や文化についての知識・理解

What's this?という意味を日本語で確認する場面があったが，必要なことだと感じた。この表現は，今回の授業だけでなく，６年生まで頻繁に出てくるキーになる表現で，しっかり押さえ

ておく必要があろう。

「英語を学ぶ」という感じより「ゲームを楽しむ」という感じできた授業の流れが，どんなときにaがanになるということやgrapesの-sの説明を日本語でした時点で，「英語の知識を学ぶ」という方向に一瞬向かったように感じた。良し悪しの問題ではなく，ねらいによるところだろう。

E　その他

今回担当のALTの特徴なのかもしれないが，ALTの話す英語が低学年に話しかけるにしては，とても速く感じた。また，Classroom Englishの種類，分量ともに，6年生より多く感じた。ただ，小学校での英語活動のねらいのひとつは，「英語のシャワー」を浴びせることにあると聞いていたので当然なのだろう。また，学級担任の話す英語の分量もとても多くて感心した。

教師がリピートの指示を出さなくても，すぐに英語を真似する（＝口に出す）特徴が見て取れた。この時期の児童の発達段階の特徴と言える。

It's grapes.は，正しくは，They are grapes.なのだろうが，ねらいが，grapesにあるので，ALTもそのまま使ったということであった。

What do you like?からWhat do you have?へ発展した。文構造は類似しているが，もう少しhaveの持つイメージ作りがあってもいいかなと思った。

説明中，すこし子供達の様子に落ちつきがなくなったとき，学級担任が，すかさず日本語で押さえる場面があった。ほとんど英語で授業が流れてきたが，ここでの日本語は効果的であった。

まだ，2年生の始めの時期だというのに，子どもが司会をして振り返りを進めているのには，大いに感心した。また，「楽しかった」「慣れた」「うれしい」などの肯定的な振り返りがほとんどで，授業が成功した証しだろうと思った。中学校の授業でこのような感想が出てくるだろうか（＝おそらく，出てこないだろう）。発達段階を考慮すると，同じような授業展開は望めないが，今回の授業を大いに参考にして，中学校では「まとまりのある分量でのコミュニケーション」の中で学ぶ喜びを与えることができるように頑張りたい。

3．1年生の実践

1年生では，年度当初，「英語アンケート」および「英語調査」を実施し，中学校入学前の学習の様子や学力についての調査をした。また7月までの実践としては，「テーマ設定にあたって」で述べたAの柱「スモール・トークのような瞬間的・即興的なやりとり。その場で考え，対話する活動。」を念頭に置き，2年生後半から3年生で実施するスモール・トークに向けての基礎・基本を定着させる活動，知識を与えることを意識した活動を主に実践してきた。

(1)　中学入学前の学習の様子

本校の1年生は，附属小学校出身の生徒4分の3，それ以外の小学校出身の生徒4分の1で構成されている。附属小学校以外の小学校出身の生徒の中には，英語特区である金沢市以外の小学校出身者も含まれている。そこで，中学校での英語の学習が始まる前に「英語アンケート」と「英語検査」をし，小学校での学習の様子や生徒の英語の力をつかむことにした。4月に実施した「英語アンケート」の結果は，資料1（p.211～213）にまとめた。

小学校高学年での，英語学習について聞いたところ，37％が中学校の教科書を使って英語の勉強をしたと答えている。金沢市立の小学校では，6年生の時点で中学校1年生で使われる教科書を配布し，

入学前に教科書を使った英語の学習が始まっている。(この数値が全体の4分の1である25%を超えているのは，附属小学校で使用した副読本を教科書と誤解したものと思われる。) 3%の生徒は，英語に全く触れていなかった。小学校では，88%の生徒が何らかの形で外国人の先生を通して英語に触れていた。

小学校で習ったローマ字については，得意51%，まあまあ45%，苦手と答えた生徒は4%であった。また，アルファベットの大文字，小文字についてはいずれも94%以上の生徒が，読んだり書いたりできると答えており，ほとんど読めない，書けないと答えた生徒は1%だけだった。ローマ字までは，ほとんどの生徒がそれほど負担を感じないで書いたり，読んだりできると思われる。

塾や英会話など小学校以外のところで英語を習ったことのある生徒は，79%と高い結果であった。習った期間は47%が1カ月～1年，31%が2～4年，24%が5年以上であった。英語検定の級を持っているのは29%で，そのうち87%が4・5級，23%が3級以上であった。海外で6カ月以上生活した経験がある生徒は6%で，米国が多く，いずれも1～2年の滞在だった。

「英語が好き」と答えた生徒は39%，「まあまあ好き」は47%，「好きではない」は14%だった。

「英語検査」は，中学校1年1学期までの範囲のリスニングを含むA社のペーパーテストを実施した。結果の数値については詳しく述べないが，「理解の能力」(聞くこと・読むこと) と「言語に関する知識・理解」のうち，あいさつに関するものが，優れていた。次に，「言語に関する知識・理解」のうち，あいさつ以外のものが続いた。一方，「表現の能力」については，まだまだ未熟な面が目立つ結果となった。

(2) 小学校の英語活動から学ぶこと

昨年度から小学校の授業を参観し，実際に中学校1年生として入学してくる4分の3にあたる生徒の6年生の時の学習の様子を観察してきた。小学校で身に付けてきたものを生かした中学校での取り組みを考えた。

小学校では，児童に飽きさせることなく1つの表現を繰り返し練習させるために，短時間で終わる様々な練習活動を取り入れていた。中学校では，英語に対する素直な興味や関心を中学校でも持続させていくために，また注意力が散漫になりがちな生徒のために，できるだけ短時間で終わる活動を授業に盛り込んでいこうと考えた。本校ではこれまでも，BINGOやスモール・トークのような短い時間に区切られた活動をしてきており，BINGOのゲーム的な要素はこれまでも生徒を引きつけてきているので，それらをうまく発展させた活動を行っていくことにした。

小学校では，毎回の授業で積み重ねられた知識はしっかり定着していることが感じられた。あいさつや曜日，日付の言い方，アルファベットの音などがそれである。またClassroom Englishが想像以上に多く使われ，(その学年には) 難しいと思われる表現も児童に理解されているようだった。一方，すぐ前の時間に使った語や表現を簡単に忘れてしまっているという面も見られた。毎回の授業で，生徒が継続して練習したり，使っていったりする工夫が必要である。

以上のことから，1年生では，BINGOの地図を使ってのQ-Aや暗唱活動を毎回の授業の中で取り組んでいくことはできないかと考えた。

(3) 問題解決を促す「学びの交流」

広島大学教授の森敏昭先生から，「3色の学びの糸」を授業の中でうまく編みあげていく中で，生

徒は自己形成をしていくことを教えていただいた。特に問題解決力の育成には，学びの原動力となる「情けの赤い糸（＝個性の糸）」と基本的な知識となる「理の青い糸（＝知性化の糸）」を「和の黄の糸（＝社会化の糸）」で編み込んでいく「学びの交流」を，１年生の授業の中にどのように取り入れていくかを考えた。英語科の中で，これまで取り組んできた「スモール・トーク」の中にも相手の表現から学ぶという面があったことを思い起こし，英語の表現を教え合ったり，ペアやグループで１つの課題について話し合ったりしながら，課題を解決していく場面を授業に盛り込んでいくことにした。

１年生では，後で述べるOne-Minute Talkのペア活動の中で，またそこで扱う英語の対話を考えるグループ活動の中で，生徒に「学びの交流」をさせていきたいと考えた。

(4) 「問題解決のプロセス」と「問題解決力」の関係の枠組みの中での授業

１年生の授業では，２年生後半から３年生に行っている「スモール・トーク」に結びつくような活動を「One-Minute Talk」として取り入れることにした。スモール・トークは，相手との即興的な会話をできるだけ沈黙することなく続けるという活動であるが，１年時から，この活動を支えるコミュニケーションの基礎となる様々な力を養っていくような活動にしたいと考えた。

１年生は，英語の学習を始めたばかりであり，まだまだ多くの表現を身に付けている段階とは言えない。そこで，教師は生徒への働きかけの中で，できるだけ多くの知識や会話のstrategyを与え，また毎回の授業で繰り返し活動させることを通して，経験を積み重ねさせ，生徒がさらに高い問題解決力を身に付けていけるようにしていきたいと考えた。

１年生で行うOne-Minute Talkは，ある１つの表現の一部をいろいろに言い換えながら１分間で，できるだけ多くの文を言う活動である。ペア活動とし，相手は英語で相槌をうち，「会話しているように」しながら文の数を数えていく。

問題解決の３段階のプロセスを次のように，この活動の中に取り入れ，生徒の問題解決力を育てていきたい。

①状況把握　「トピック」として与えられるOne-Minute Talkの課題を理解する。
②計画立案　「トピック」の表現中の空欄にどのような英語を入れればよいかを検討する。
③計画遂行　「トピック」の表現中の空欄に英語を入れて発話する。

(5) 同僚参観授業

以下は７月に実施した同僚参観の指導案である。これまで授業の中で行ってきた「BINGO (Where Are You?を含む)」，「Can You Say in English?」と「One-Minute Talk」についても，ここで詳しく述べていくことにする。

英語科　同僚参観　授業略案

１年　三田耕平

実施日時（実施クラス）　７月15日(金)　３限(１年３組)　４限(１年４組)

1　題　材　『スモール・トーク』に向けて（毎時間の授業の中で）

2　目　標

◎２年生後半～３年生の活動『スモール・トーク』を念頭におきながら，１年生では，いろいろな英語の表現を身に付けたり，会話を続けるための基礎的な表現力を養うことを目標にしている。

・初歩的な英語を用いて，身近なものを説明しようとする。(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)

・初歩的な英語を用いて，場面や相手・目的に応じて適切に話すことができる。(表現)

・初歩的な英語を用いて，自分の考えや気持ちなどを話すことができる。(表現)

・ものを説明するときに必要な語や文型を身に付けている。(言語についての知識・理解)

3　指導計画（毎時間の活動）

①BINGO（英語科では全学年でBINGOを使った活動をしている）

BINGOで読まれた単語を使って教師が生徒に質問する。2往復くらいの会話にする。毎回2個の質問を用意し，クラス全体に問いかけた後，指名し答えさせる。突然質問されたことに即座に答える表現力と何とか英語で答えようとする態度を育てるための活動である。

brother → T: Do you have any brothers?　S: Yes, I do.　I have one brother.　T: Is he a high school student?　S: No, he isn't. He's a junior high school student.

②Where Are You?

BINGOになった生徒，下の③，④の活動でパートナーに勝った生徒は，地図（BINGOの本にある）上の次の都市へ飛行機で旅をできる。記入の際，どこにいるかを教師－生徒，生徒－生徒で応答する。毎回の活動の積み重ねによる定着（自分のことを答える，友達に尋ねる，友達のことを答える）を目指している。

1　教師－生徒

T: Mr. A, where are you now?

A: I'm in Sydney.

2　生徒－生徒（1分間に多くの生徒に尋ねる）

A: Where are you now?

B: I'm in Sydney.　How about you, Mr. A?

A: I'm in Sydney, too.

3　教師－生徒

T: Miss B, is Mr. A in Sydney?

B: Yes, he is.　He is in Sydney.

③Can You Say in English?

本校英語科では全学年でＮＨＫラジオ基礎英語（3年生は「英会話入門」）の聴取に取り組ませている。今年度の1年生については，聴取のスタートとして4月号を毎回の授業の中で聞き，ある程度まとまった量の英語表現の蓄積を目指した。

このCan You Say in English?の活動は，積み重ねによる英語表現の知識の定着を目指している。4月から始めた基礎英語や教科書の表現の中から1回に40個を取り上げ暗唱し，毎時間ペアの生徒と正しく「言える」かをチェックし合う活動である。暗唱をする際は，隣の席の生徒とプリントを交換し，プリントの日本語の部分だけを見ながら2分間で40個の英語を言い，パートナーの生徒がチェックの印を記入していくものである。6回で，40個の英語表現を暗唱することを目標にした。9月からは，生徒の負担と所要時間のことを考え，1分間で20個の表現を暗唱し，4回で20個全てを暗唱することを目標とした。資料2（p.214）参照。

④One-Minute Talk

実施の方法は下の通りである。授業では，下の3)のような活動をOne-Minute Talkと呼んでいるが，ここではその前後に付随する活動も含めて，One-Minute Talkとして述べる。この活動は厳密にはTalkとは呼べないかもしれないが，3年生のスモール・トークのような活動に近づけていきたいという願いを込めてこのように呼ぶことにした。

ペアになったパートナーの言った英語を真似たり，ヒントにしたりする場面と空欄部分をグループで考え発表する場面の2つで「学びの交流」を期待している。また，扱われる英語表現の他，アイコンタクトやジェスチャー，相槌，マナーなどの知識を毎回の経験の積み重ねによって定着させることを目指している。

1) 「今日のトピック」として空欄のある英語の文章を与え，自由にいろいろな語などを入れ，1分間にできるだけ多くの文をつくり，言う。ペアになったパートナーが言えた文の数を数える。
   This is my (　　). Is this your (　　)? I (don't) like (　　). など
2) 空欄に入る表現を個人やグループで考えさせ，発表させる。活動を始める前のヒントとなる。
3) 少しずつ会話的な形に変えていく。
   A: Do you like (　　)? ＊Aができるだけ，多くの文を言う。
   B: Yes, I do. / No, I don't. ＊Bは，答えながら，Aがいくつ英文を言えたかを数える。
   いすを動かし，パートナーと対面する。アイコンタクトやジェスチャーなどに気を付けながら対話をする。
4) トピックとして与えられた文への応答を2)と同じような要領で考えさせ，発表させる。
   ・A: Is this your (　　)?
     B: (　　). ＊Yes, it is. / No, it isn't. / No, it's your pen. / Oh, thank you!
   ・A: I like ①(　　) very much!
     B: ②(　　).
     ＊①cats → ②Oh, really? / Me too. / I don't like cats. / I like dogs.
     ①your pen → ②Here you are. / Thank you.
     ①snakes → ②Are you OK?
5) 5月～9月に扱った表現（「トピック」として生徒に与える）は，以下のとおりである。

①This is my ～.
②Is this your ～?
③A: Is this your ～?
　B: Yes, it is. / No, it isn't.
④A: Is that your ～?
　B: Yes, it is. / No, it isn't.
⑤A: Is this your ～?
　B: Yes, it is.
　A: I like your ～.
　B: Thank you.
⑥A: I like ～ very much.
　B: Me too.
⑦A: Do you like ～?
　B: Yes, I do. / No, I don't.
⑧A: Do you know ～?
　B: Yes, I do. / No, I don't.
⑨A: Wow, a lot of ～!
　B: Yes, I / we do.
⑩A: Please look at this ～.
　B: OK.
⑪A: Let's play ～.
　B: Yes, let's..
⑫A: Let's ～.
　B: OK.

4　授業の流れ（授業の最初の約20分）

1．BINGO（今回の同僚参観では，実施しない。）

2．Can You Say in English?　6回目（最終）

1)　1分30秒個人練習をする。

2)　パートナーとジャンケンし，順番を決める。負けた生徒が先に言い，勝った生徒がチェックする。2分間。交代し，同様の活動をする。2分間。

3．One-Minute Talk

1)　今日のトピックを理解する。

Do you know (　　)?

2)　どんなものが空欄に入るか，思い出す。

3)　①に入るものとそれに続く文②をグループで考える。(1分30秒)

A:　Do you know ①(　　)?

B:　Yes, I do. ②(　　).

4)　グループで話し合った3)の結果を発表する。

5)　Bには，Yes, I do. または No, I don't. だけを入れて，One-Minute Talk の活動をする。

6)　ペアの生徒にいすを向け，今回はアイコンタクトに気を付けさせる。

4．Where Are You?（BINGOの地図を使って）

・(1でBINGOになった生徒,) 2，3でパートナーに勝った生徒に地図上の次の都市へ進ませる。

・教師が生徒に，Where are you?　Are you in ～?　Is he in ～? などを使って尋ねる。

【考察1】BINGO

BINGOでは，出てきた単語を使って様々な英語の質問をする。質問は最初クラス全体に投げかけられ，次にある生徒が指名される。生徒は，この最初の質問に答えるわけだが，その後教師が，答えたことについて，さらに1つか2つの質問をする。突然投げかけられた教師からの質問に対し，即座に答えなければならないことは，問題解決の力を試されることになるだろう。また，間違った答え方について教師は適宜改善点を示したり，正しい答え方を示したりすることができる。また，アイコンタクト，沈黙を続けないための「ええと」や「わかりません」といった表現を教える機会，会話のstrategyを教える良い機会ともなった。

【考察2】Where Are You?

教師が生徒にWhere are you?と尋ね，I'm in ～.と答える活動は，少しずつ広がりを持たせ，下に示すような形になっている。友達に聞く，自分のことを答える，友達のことを伝えるなどの活動の積み重ねによる定着を期待していたが，有名な都市と国であれば，素早い受け答えができるようになってきた。

1　教師－生徒

T: Mr. A, where are you now?

A: I'm in Sydney.

＊これに続けて国の名前を用いて質問するようにした。

T: Are you in Australia?

A: Yes, I am.

2　生徒－生徒

＊「1分間に多くの生徒に尋ねる」活動を着席のまま，次第に遠くに座っている友達に尋ねさせるようにした。その際，教科書で学習したExcuse me. I have a question.を使わせ，質問を行わせた。大声で友達を呼び，質問しなければならず，Excuse me, ～!の表現が本当に必要な状況をつくれた。

A: Excuse me, Miss B. I have a question.

B: Yes?

A: Where are you now?

B: I'm in Sydney. How about you, Mr. A?

A: I'm in Sydney, too.

3　教師－生徒

＊下は，Aとのやり取りの後，Aの隣のBに対して質問したものである。

T: Miss B, is Mr. A in Sydney. (Where is Mr. A? も用いた)

B: Yes, he is. He is in Sydney.

＊Aとのやり取りの中で使われたSydneyを使わずに国の名前に変えて質問した。

T: Miss B, is Mr. A in Australia?

B: Yes, he is.

T: He is in...

B: あっ。He is in Sydney.

こういうパターンを続けていくと，次第に次のような流れが生まれた。

T: Miss B, is Mr. A in Australia?

B: Yes, he is. He is in Sydney.

＊Aとのやり取りなしで突然Bに次のように質問してみた。

T: Miss B, is Mr. A in Sydney? (Where is Mr. A?)

B: え？ ねえ，Aくん，どこにおる？

T: Miss B, ask him in English. 英語で聞いてごらん。

B: あ，そうか。Where are you?

A: I'm in Sydney.

(T: Miss B, where is Mr. A?)

B: He is in Sydney.

【考察3】Can You Say in English?

Can You Say in English?の活動は，基礎英語の聴取により，ある程度まとまった量の英語表現を扱うことができた。生徒は，嬉々としてこの活動に取り組んでいる。最初の2回は40個の英語表現を2分間で暗唱させたが，最後の40個まで暗唱できた生徒は，多くなかった。また，授業でもかなり時間を取ることになった。同僚参観でも，量が多すぎるのではないか，また特に定着を目指したい表現をプリントの最初の方に取り上げてはどうかという助言をもらい，活動を再考してみた。9月からは，20個の英語表現を1分間，4回で20個全部を暗唱することにした。

この活動では，必要に応じて教師が模範を示して（モデリング）生徒に練習させた（コーチング）。ここで取り上げた表現のうち，生徒がClassroom Englishとして使えるものについては，適宜使用を促し（スキャンホールディング），毎日の授業で使っていける（フェーディング）ようにしている。また有用な

表現をこの活動で取り上げることによって，Classroom Englishを増やしていくようにしている。

この活動は，英語らしいリズム，単語と単語の音のつながりや変化を教えるよい機会となった。また，普段の学校生活の中で，ここで取り上げた表現を英語のリズムを楽しみながら口にしている生徒の様子も見ることができた。

【考察４】One-Minute Talk

A　経験を積み重ねる（即興的に話す力を高める）

これまで英語科では，２年生後半から３年生にスモール・トークの活動を続けてきた。与えられたトピックについて，２人で即興的に会話をし，沈黙をしないで上手に会話を継続させる活動である。この「即興的に自分の持っている知識を引き出して問題を解決する活動」につなげていくために１年生では，即興的に話す力を高める活動を取り入れたいと考えた。また，その活動を毎回の授業で繰り返し行い，経験を積み重ねることによって，生徒の力を高めていくことができるのではないかと考えた。

B　知識の定着，「学びの交流」

この活動は，「I like ～.の～の部分に次々と語を入れ，制限時間の中でできるだけ沢山言う」というアイディアから生まれた。新しく学習した表現を取り上げ，繰り返し言うことによって知識も定着させることができるのではないかと考えた。～に入るもののうち，-(e)sがつくもの，つかないものの区別などの知識を示すよい機会となった。ペア活動とすることで，前の人が使った語を真似たり，発想を広げたりする「学びの交流」も期待できると考えた。

C　コミュニケーション的な活動

機械的に１人の生徒がある表現を繰り返すのではなく，もう１人の生徒を聞き手として短い言葉を発してもらうことにした。また，～の部分に聞き手が喜ぶようなものを入れて，話させることもできるということに気付き，機械的ではあるが，コミュニケーション的でもある活動ができるのではないかと考え，このような形に落ち着いていった。現段階では，制限時間の中でできるだけ多くの文を言うことに生徒の興味が向いている。少しずつコミュニケーションに主眼を置いたものに変化させていき，コミュニケーションを楽しむ段階に進みたい。

D　経験を積み重ねる（会話のstrategy）

スモール・トークのように会話を続ける活動では，短い言葉で相手に相槌を打ったり，相手の目を見て話したり，ジェスチャーをしたりして，会話を進めていく。こういった会話のstrategyは知識をもっているだけではなく，実際に経験を積み重ねながら，身に付けていくものでもある。

E　会話の広がり，「学びの交流」

実際に会話をするとき，ある質問に対し，単にYes.やNo.だけで終わってしまうと，会話は長くは続かない。少し文を足して，新しい情報を加えたり，No.と言った理由を説明したりすると会話は次に進んでいく。このOne-Minute Talkで取り上げる会話を使って，このような会話の広がりを意識させる活動をした。ここでも「学びの交流」を利用し，示された会話にどのような文が続くかをグループで話し合わせ，発表，交流させた。

次にOne-Minute Talkで取り上げた表現の中から二つを紹介する。示したものは実際に生徒がグループで考えたものである。指導者が生徒に与えたコメントも記した。

(1)　課題１（①，②にどんな英語が入るか４人グループで考えよう。）

A: Do you know（ ① ）?

B: Yes, I do. (　　②　　).

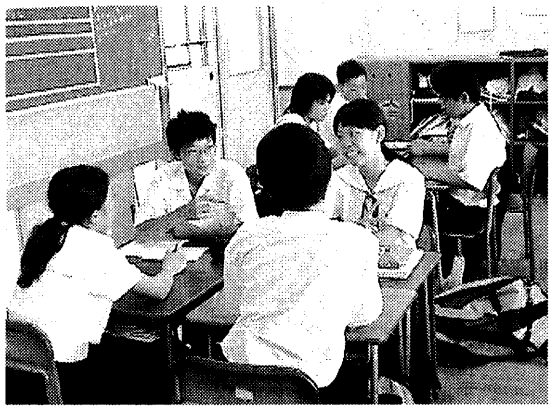
・説明（自分の思い，理由）

①について説明したり，自分の好み，知っている理由を述べる文を付け加えたグループは多かった。授業の中では，基礎英語４月号や教科書で学習した表現や話をうまく使っていると，ほめた。

A: Do you know my sister Yoshi-chan?
B: Yes, I do.　She's shy.

A: Do you know Kyoto?
B: Yes, I do. It's beautiful.

A: Do you know Australia?
B: Yes, I do. My sister is in Australia.



A: Do you know Mr. Mita?
B: Yes, I do.　He's my teacher.

A: Do you know Hokkaido?
B: Yes, I do.　But I don't like it.

A: Do you know soccer?
B: Yes, I do.　I like it.　It's fun.

A: Do you know *goya*?
B: Yes, I do.　It's my favorite food.

A: Do you know that building?
B: Yes, I do.　That building is mine.

A: Do you know Mr. Matsui?
B: Yes, I do.　But I don't know Mr. Matsui well.

A: Do you know baseball?
B: Yes, I do. But I don't play baseball.

A: Do you know Chinese?
B: Yes, I do.　But I don't speak Chinese.

＊上の３つは，いずれも「知っていることは知っているが…」とbutを使った表現になっている。下の(2)のbutの方が自然な感じの文になるが，授業では，「butを上手に使って工夫したね」とほめた。

・繰り返す

単純に繰り返した表現であるが，生徒はmy fatherを，your fatherにすることに気を付けて！とメモに書いていた。同僚参観で，「単純に繰り返すだけでなく，もう1文加えることを教えたらよい。」という助言をいただいたが，指導者は相手の言ったことをそのまま繰り返す相槌（エコーイング，基礎英語）やYes, I know your father.という繰り返しは，確認にもなりいいことだと教えていたために，このような答えが出てきたと思われる。

A: Do you know my father?

B: Yes, I do. I know your father.

・誘う

教科書に出てきた話を利用して，おもしろい展開のお話にしているとほめた。

A: Do you know any good restaurants?

B: Yes, I do. Let's go!

・質問する

実際のスモール・トークの中でも，生徒がよく使う便利な表現も出てきた。同じ内容の質問をすぐに投げかけられる便利な表現を使えば，とっても便利だねとほめた。

A: Do you know football?

B: Yes, I do. How about you?

(2) 課題2（①，②にどんな英語が入るか4人グループで考えよう。）

(1)のBの返事をNo.にしたものも別の時間に取り上げた。②に入る表現も(1)に比べ考えやすそうだった。

A: Do you know (①)?

B: No, I don't. (②).

・説明（自分の思い，理由）

(1)でも見られたbutを使った表現は，指導者もなるほど，おもしろいと感じた。とても，いい発想のおもしろい文だとほめた。

A: Do you know Tokyo?

B: No, I don't. But I know Kyoto.

A: Do you know Mr. Suzuki?

B: No, I don't. But I know Miss Suzuki.

・質問する

知らないものについては質問したくなる，という当然の衝動をうまく質問にしているとほめた。

A: Do you know Tokyo?

B: No, I don't. Where is it?

＊Ｂさんは，Tokyoというのは，都市の名前だというのは知っていたんだねと確認した。

A: Do you know Ishikawa?
B: No, I don't.　What's that?
＊「何それ？」とIshikawaが地名だということも知らない感じだねと確認した。

A: Do you know Ishikawa?
T: No, I don't. Is it delicious?　（教師が示した例）
＊何かさっぱり分からず，美味しそうに聞こえたのか，食べ物だと勘違いした人だねとコメント。

A: Do you know Mr. Suzuki?
B: No, I don't. Is he handsome?
＊人やものについて形容詞を使って質問する(1)の中の「説明」と似た発想で文を考えたグループもあった。おもしろいお話になっているとほめた。Ｂさんは，男の人の話になると，いつもこんな質問してるの？と尋ねると，これをつくった生徒は「そうそう」と答えていた。

・謝る
実際の会話では，(I'm)Sorry, I don't know.となる決まった表現から，うまく持ってきているとほめた。
A: Do you know any good restaurants?
B: No, I don't.　I'm sorry.

F　成果と課題
・現在は，１つの短い表現を扱うに留まっているので，２つの表現を組み合わた課題を出したり，Ｅで出てきたものを参考にしながら，与えられた表現の中で自由に会話を進めていく活動も取り入れていきたい。また，そのような活動の際，生徒の学習の成果を確かめていきたい。
・活動の際に対座させ，アイコンタクトへの注意をするほか，トピックの内容に応じて，必要なジェスチャーなどを付け加えさせた。現在は，黒板に示したトピックを残したままにしているが，暗唱させ，文字に頼らない活動に移行していく必要を感じている。
・このような活動をさせると，話をおもしろい展開に持っていく表現や，ユニークな発想，一瞬会話が成り立っていないように見えても，話の背景などを説明させると，そういう場合もあり得るというものが出てきた。グループ内やクラスでの発表の際も生徒から，「へえ，なるほど。」という声が聞かれた。

【同僚からのコメント】（発達段階について，問題解決力について）
これまで短時間で終わる活動を継続して行い，上のような考察をしてきたが，発達段階や問題解決力について，７月の授業で同僚参観を実施し，同僚から以下のコメントをもらった。

◎【発達段階について】

〔マクロ的視点〕

ペア活動

・ペア活動は，活発にやりとりしているところが多い。

・他の人の表現の仕方を見る，まねる姿が見られた。

グループ活動

・班活動は，４人で協力して考える姿勢がうすかった。２人で考えるところが多いように見えた。

クラス全体

・集中力がない。

・発表を聞く姿勢がよくない。友人はどんな考えを持っているのか知りたい，というものをあまり感じられない。

〔ミクロ的視点〕

ペア活動

・少数だがペア活動で，目をみてやっていない。はずかしい？　黒板を見たり，下を見たりしている。また，身体を向き合わせないで，身体が前向きのまま生徒がいる。

◎【問題解決力（英語は「表現力」）】

・コミュニケーション能力，表現力については，これからだなと思いました。発展途上。

・知識をつけて，その上で表現力をつける！というものを感じました。

・基礎的な表現を生徒から引き出すためのグループ活動は有効だと思いました。

・４人で知恵を出し合っていました。

・グループから出された意見に対して，そういう答えがあるのか…と納得しているグループが多かった。

・１年と２年の活動の間に大きな壁があると感じた。１年生が英語を学んで間もないということが原因であると思う。だから，これから後の１年生の授業が大変大切になってくると感じた。

・これから後の２年生までの間は，どの教科でも，表現力の基礎など問題解決に通じるいろんなことの基礎を身に付けさせる大切な時期となると感じました。

ペア活動，グループ活動などの学習形態によって，生徒の学習態度に違いが見られた。今回の学習ではペア活動は活発に取り組んでおり，学び合いをしている様子も伺えるが，グループ活動には集中できておらず，グループの一部に活動の責任を任せてしまうような様子が伺えた。ペアで取り組むOne-Minute Talkなどの具体的な活動には，しっかりと取り組めるが，その活動には直接役立たない「いろいろな文を考えてみる」だけの活動に喜びを見出せていないのではないかと感じた。この中１の時期は，「考える」だけに留めず，具体的に役立つ，目的のある活動にしていく必要があると思われる。各グループの交流から出てきた表現を実際に使う活動の場をつくるなどの改善が必要である。

コミュニケーション活動の際に，細かな姿勢に注意を払えないまま活動をしているペアがあるようだが，毎回の活動の度に，活動の目的や将来の具体的な活動に向けての準備であることを告げ，目的意識をもった活動にしていくことで改善していきたい。各ペアの中で，毎回１つ１つのマナーが確実になされていくように，教師によるモデル（例えば，「こうやってアイコンタクトをするんだよ」という良い例を見せる）を示したり，積み重ねの大切さについて繰り返していくことを地道にやっていく必要があることを痛感した。

問題解決力（表現力）については，学びの途中であることが同僚参観のコメントからも読み取ることができた。教師が与えたり，ペアやグループ活動の仲間から見付けたりした良い表現やマナーなどを，真似たり，知識として覚えたりしながら，さらに高い力を身に付けていくことが大切であると考えている。

4．2年生の実践

ここで述べる実践は，「テーマ設定にあたって」で述べたBの柱，すなわち，「自己紹介スピーチのような長い時間をかけて計画的に行うもの。書いて準備し，覚えて，スピーチとして発表する」タイプの授業についてのものである。授業での活動はスピーチではなく，ある語をparaphraseする活動であるが，授業計画を立てるに際して，以下の3点を念頭において行った。

(1) 問題解決を促がす「学びの交流」

東北大学名誉教授　安井　稔先生から，次のようなことを聞いたことがある。「英語学習者を，船に喩えてみよう。英語丸（＝英語学習者）という船が，水のないまっさらな大地にいると思って欲しい。英語ができるようになるということは，この船が水に浮かび前進できるようになるということであるが，最初は，その水がない。英語学習では，この水の一滴一滴が単語であり熟語である。もちろん，水一滴では船は浮かばないから，水をどんどんためていかなければならない。しかし，水がある程度たまっても，船はなかなか浮かばない。この時期が結構忍耐の要る時期なのだけれど，それでも水をため続けると，ある日，突然，英語丸はふっと浮かびあがるのである。…」

先生のこの考えには今も強くひきつけられるものがあり，共感する部分が多い。ですから，中学校の英語学習は，ここでいう一滴一滴の水をためる時期の中にあり，そのためには，授業の中では，語彙や熟語などの水滴に相当する部分を計画的に注入しなければならない，と考えている。特に，中学校2年生までは，こうした点に重点を置いた授業が多くなっている。

こうした考えに基づいた授業を，5月10日に，本年度の本校研究のアドバイザー　森　敏昭先生（広島大学大学院教授）に参観していただいた。森先生からは，授業後に本校研究のテーマである問題解決力育成にからめて次のようなアドバイスをいただいた。

①今日のようなオーディオリンガル・メソッドを用いた授業は，60年代にピークを迎えた。

②この方法は，英語の定着を図るには確かによい方法である。正しいスキルを学習者が身につけていく。

③しかしながら，この方法ばかりで授業を行うと学習者が飽きてくる。

④今日の授業は，「青い糸（＝知性化の糸）」を織り込んだ授業であるが，「赤い糸（＝個性の糸）」や「黄の糸（＝社会化の糸）」をもっと織り込むようにするとよいのではないか。（3色の糸については，p.23を参照）

⑤例えば，生徒の言いたいことをもっと取り入れてみればどうだろうか。

また，この日に，他の教科の授業に対するアドバイスもあったのであるが，問題解決力育成の観点から，授業一般について，さらに次のようなアドバイスをいただいた。

⑥問題解決力を育成するには，「学びの交流」が必要となる。

⑦「赤と青の糸」を「黄の糸」でつなげるコラボレーションが授業の中にあるとよい。

⑧交流ができるワークシートの工夫をしてみてはどうか。

⑨モデリング（教師が模範を示す）→コーチング（手取り足取りやらせてみる）→スキャホールディ

ング(活動の足場作り) →フェーディング(学習者の自立化) という4つの流れを盛り込むとよい。

自分の授業が「青い糸」で織り上げられたものであることを認識しつつ，不足している「赤い糸」や「黄の糸」をどのように盛り込んでいったらよいか。また，問題解決力育成の点では，「学びの交流」が重要な要素であるが，これをどのように授業の中に仕組めばよいのか。さらに，その手法としてモデリングからフェーディングをいかに反映していくのかなどを，2年の授業実践の課題として，授業計画を立てることにした。

(2) 小学校の英語活動から学ぶこと

本校の生徒の約4分の3の生徒は金沢大学附属小学校から，他の生徒は金沢市およびその近郊の小学校から入学してくる。小学校から中学校へつながる英語学習を考えるとき，進学してくる生徒数から，金沢大学附属小学校の英語学習がどのようになっているのかを念頭に置くことが重要な要素になってくる。英語科では本年度の研究を始める前から，附属小学校の授業を参観させてもらっている。冒頭でまとめたように，その参観を通して私たち中学校教員は，多くのことを感じたり学んだりしている。

附属小学校の英語学習は，「教科」ではなく，あくまで，総合学習の中に位置づけられているので，子どもたちは，単語をおぼえているか否かを評価されたり，それを書けるか否かを評価されたりはしない。ですから，いわゆる「英語力」がどれだけついているのかはデータとしては把握できないが，6年間の英語学習が確実に子供たちになんらかの形として蓄積されていると，参観を通してひしひしと感じる。この蓄積されているものを中学校の英語学習でいかに活かしていくかが中学校教員の課題である。

今回の授業を考えるとき，先に述べたように「学びの交流」や「黄の糸」を意識しながら行うことにしたのであるが，6月中旬に参観した小学校2年生の授業からあるヒントを得た。そこで見られたのは，子ども同士の英語活動の振り返りであった。そのときの所感は以下のとおりである。

まだ，2年生の始めの時期だというのに，子どもが司会をして振り返りを進めているのには，大いに感心した。また，「楽しかった」「慣れた」「うれしい」などの肯定的な振り返りがほとんどで，授業が成功した証だろうと思った。中学校の授業でこのような感想が出てくるだろうか（＝おそらく，出てこないだろう。)。発達段階を考慮すると，同じような授業展開は望めないが，今回の授業を大いに参考にして，中学校では「まとまりのある分量でのコミュニケーション」の中で学ぶ喜びを与えることができるように頑張りたい。

小学校の研究テーマは『創発のある学び舎』であるが，『創発』は「学びの交流」や「黄の糸」と非常に類似した概念で構成されている。現在の中学2年生はこの概念の下，小学校で学んでいる。参観した小学校2年生の児童と中学2年生では，発達段階は全く異なるので同じ授業形態は組めないものの，「学びの交流」の重要性を肌で感じている点においては不変だと思われる。こうした子どもの経験をうまく引き出すことができればと考えた。

(3) 「問題解決のプロセス」と「問題解決力」の関係の枠組みの中での授業

本校の研究総論で述べられているように（p.20参照)，問題解決のプロセスとして，状況把握→計

画立案→計画遂行の3段階の流れを考えている。この流れを授業の中に取り入れることで，生徒の問題解決力を育成することができると考えているのだが，2年生では，「ある語」をparaphraseするという課題を理解し（＝状況把握），どのようにparaphraseしていくのがよいのかを検討し（＝計画立案），実際にparaphraseする（＝計画遂行）という流れの授業を行うことにした。また，paraphraseするということは，生徒の問題解決力のうち何に働きかけていくことになるのかと考える時，それは，表現力だけではなく，生徒の現在までの経験や知識，それらを統合する力，また，イメージ力などに働きかけることになるのであろうと想定して授業を実践することにした。

学習指導要領には語彙の取り扱いについて，900語程度と示されている。必要に応じて様々な語を教えることはできるのだろうが，生徒にとって，この語数では自分の思いを十分相手に伝えることができないことが度々ある。そのような時にparaphraseする力が備わっていれば，様々な状況に対応していけると思われる。本年度の研究では，直接的に実践的コミュニケーション能力の育成に言及はしていないが，paraphraseする力は，このことに大いに関係する力の一つであると考える。

授業は，6月下旬に以下の指導案に従って実施した。本年度の本校の研究方針に従い，この授業では，できるだけ多くの同僚に参観してもらい，発達段階や問題解決力に関して意見をもらうことになった。指導案は，同僚に向けて書かれた略案であることを断っておく。

英語科　同僚参観　授業略案

2年英語科　端崎　圭一

1．題　材　　We miss Jim!（英語で説明しよう）

2．目　標

・初歩的な英語を用いて，身近なものを説明しようとする。

・初歩的な英語を用いて，場面や相手・目的に応じて適切に話す／書くことができる。

・初歩的な英語を用いて，自分の考えや気持ちなどをある程度の分量で話す／書くことができる。

この目標は，本時の活動において，「ある語」について，現在の英語力で説明することができる，ということになる。例えば，「apple」という語を現在の英語力で説明しようとすると，“It's a kind of fruit. It is usually red, but sometimes green. It is round. It sometimes comes from Aomori. It is good, but sometimes sour. We can buy it at a supermarket. etc.”となるであろう。

・ものを説明するときに必要な語や文型を身につけている。

※英語科では，表現力を教科の中で育成する問題解決力のとして位置づけている。
・即座の表現力（Chat, 2 min.-talkなど）…本時のビンゴの活動の中 ・準備された表現力（スピーチ活動，Show &Tellなど）…英作文の中 ・パターン化された表現力（特定の場面での会話）

3．指導計画（総時数２時限）

第１時　説明文を作る①

（クラス全員で共通の「ある語」についての説明文を考え，グループごとに発表する）

第２時　説明文を作る②

（グループ毎に，異なる語についての説明文を考え発表する。）

4．授業の流れ

広島大学大学院教授　森先生のアドバイスにより，指導案内に以下の用語を使用した。

赤い糸　思いや願い…個性化，**青い糸**　学問の体系…知性化，**黄糸**　他者との交流…社会化

【第１時】６月22日(水)

学　習　活　動	配慮事項および評価事項
1．ビンゴ	・初歩的な英語を用いて，場面や相手・目的に応じて適切に話せる。 ・ビンゴの中の語を用いての質疑応答：**即座の表現力**
2．Dictation（書取り）	・復習として，１年生の教科書の文を振り返り，あるセクションの一文を書き取らせる。 ・１と２は通常の活動：**青い糸の織り込み**
3．本時の活動内容を理解する。	・なぜこの活動をするのかの理由を説明して，生徒の学習動機づけとしたい。(「10月から再開するALTのJim先生の授業にむけて，現在の英語力を伝えよう。」) ・Jim先生の写真を提示して，Jim先生や先生の授業へのなつかしい思いを高め，Jim先生へ自分たちの半年間の成長を英語で示そうと提案する。 ・**赤い糸の織り込み**
4．例示を理解する	・“apple”について，例示する。(モデリング)
5．提示された「ある語」について，個人で説明文を考える。（ワークシート配付）	・**初歩的な英語を用いて，場面や相手・目的に応じて適切に話す／書くことができる。** ・paraphraseする「ある語」を提示する。「ある語」＝“library”
6．個人で考えた説明文をグループ内で発表し合う。	・「６」「７」の活動を通して，すばらしいアイディアへの感動や自分が忘れている表現の気づきなどが，生徒の中におきることを期待したい。 ・期間巡視をしながら，アドバイスを与える。(コーチング) ・**黄糸の織り込み（学びの交流）** ・グループ内だけでなく，クラス全体での交流も行いたい。
7．グループでベストのものを１つ完成させる。発表する。	・代表者が黒板に自分のグループのparaphraseを書き，お互いの良さを見つけあう。
8．次時の予告	

【第２時】６月23日(木)／６月24日(金)

１．ビンゴ ２．Dictation（書取り） ３．活動内容を理解する。	・前時は，“library”という共通の一語を全グループがparaphraseしたが，本時は，各グループ毎に異なる語をparaphraseすることを伝える。 ・チャレンジ意欲の喚起をする。 ・**赤い糸の織り込み**
４．提示された「ある語」について，個人で説明文を考える。	・抽選でどの語にチャレンジするかを決定する。 ・与えた語は以下の10語（または語句）。baseball, horse, basketball, park, desk, computer, ice cream, bus, pencil, vending machine
５．個人で考えた説明文をグループ内で発表し合う。	・**黄糸の織り込み（学びの交流）** ・「５」「６」の活動を通して，すばらしいアイディアへの感動や自分が忘れている表現の気づきなどが，生徒の中におきることを期待したい。 ・グループ内だけでなく，クラス全体での交流も行いたい。 ・期間巡視をしながら，アドバイスを与える。(コーチング)
６．グループでベストのものを１つ完成させる。 ７．次時の予告	・手法は同じであるが，異なる語にチャレンジさせることでparaphraseの力を徐々につけていく。(スキャホールディング) ・完成した作品をJim先生に渡すことを伝える。

【考　察】

まず，第１時で取り扱った“library”について，あるクラスのグループで作った完成文を見てみたい。

・It's a large building. It's very quiet there. It has many kinds of books. We can read books there. We can take out books there, but we can't buy books. Many people use it.

・It's quiet. It has some very wide rooms. It has a lot of books. We can use it every day. We can borrow some books. Schools usually have it.

・It's a large. It's usually square. It has a lot of books. It's in school. We can listen to many CDs.

・It's big. It has a lot of books. Our school has it. Every one uses it. We can lend books in it. We are quiet in it. It's interesting.

・It's very big building. It's in Izumino town and our school. It has a lot of books. A lot of people can borrow some books. We often use it.

・It's a kind of building. There are a lot of books in it. We can borrow books. It's in school, too. Many people use it.

文法的な誤りはまだまだあるものの，どの英文にも工夫が見られる。文の数としては，５～７文でまとめている。個人で書いていた段階では，右下の表が示すように１～３文しか書けない生徒が半数以上を占めている。書けた文の数だけから判断しても，自分より多く書けた生徒から何らかの情報や刺激（＝学びの交流）を得た生徒がいることが予想できる。

そこで，この活動を通して，どのような情報や刺激を受けているのかを，ワークシートの〔感想したこと／参考にしたこと〕から幾つか拾ってみたい。

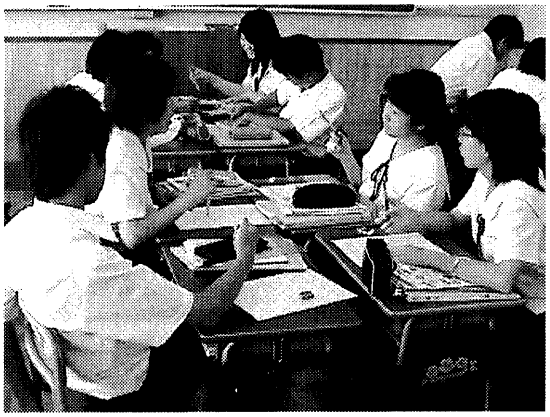
・「借りることはできるが買うことができない」この文だけで図書館ということが分かるのですごいと思った。
・CDが聞けるという文は，別の発想でおもしろかった。
・「誰でも使える」という表現が分からなかったのですが，“Many people use it.”という表現が分かった。
・図書館だから本のことだけ見るのではなく，いろいろな視点で見ている。
・みんないろいろなことを考えていた。形容詞もうまいこと使っていた。
・説明ではなく，自分の感情（＝interesting）を使っていた。
・usuallyやoftenの使い方がよい。
・「学校に図書館がある」ということや「皆が使える」などは，違う言い方をしても意味が通じる。
・そこでなにができるのか，それはなになのか，などを言っている。
・自分では思いつかないことを書いていてすごいと思った。
・公立のという意味をうまく表している。
・難しい単語が少ないので分かりやすい。
・“Everyone can use it.”などという文を自分たちは考えていなかったので，こんな風にできるのだとビックリした。
・“Our school has it.”は，主語が珍しい。
・習ったばかりの“There is ～”を使っていること。
・quietだけでなく，placeをつけると建物としてますます分かりやすい。
・いろいろな文法を用いて，応用がきいているなぁと感心した。
・一見シンプルだが，いろいろな視点から図書館を見ているところがよいと思った。
・「本屋でない」と否定文で表している。
・「しばしば」とか「いつも」とか入れなくてもいいものでも入れると感じがすごく変わった。
・文の並べ方（順番）に意識が行っていて感心。

語彙，文法，それらの用い方，そして文を考える発想など，様々な視点において友人の文から気づいたことや感心したことが多々あることが分かる。一人の問題解決力では解決できない課題が，友人の知恵を借りることでスムーズに解決できた場面ではないかと捉えたい。ただ，この第１時の時点では，実は，教師からのコーチングがこの気づきや感心に大きく関わっている。以下が第１時で教師がアドバイスした内容のメモである。

文の数	人数（38人中）
１文	２人
２文	１１人
３文	１２人
４文	９人
５文	４人

〔1組〕

・(図書館の説明で) “It's cool there.” を考えた生徒達に「いつも涼しいの」という問いかけをすると,「あっ，そっか。冬は暖かいんだ。」という反応。



〔2組〕

・「公共施設」という表現に悩む子に対して,「みんなが，それを利用できる」というという表現をしてみようとアドバイスした。

・「広い」という表現に悩む子に対して，“large” を思い出してというアドバイスをした。

・「ＡＢＣ…」を列挙する際のルールについて思い出す生徒がいた。

〔3組〕

・「レンタル」という表現をしたがる生徒がいるが，“rent” の意味を考えさせると同時に，別の表現をできるように工夫を促がした。

・“silent” を使いたがったが綴りを知らないことから,「静かに」というクラスルーム英語から“quiet” を思い出させることができた。

・みんなが使うという観点から，“I don't use ….” を “We don't use ….” へ変更したらよいことに，気づかせる。

〔4組〕

・(モデリングの段階で) 丸い／赤い／フルーツという表現が，Ａ君の口から出てきたのがうれしかった。

・「静かな場所」という表現に悩む子に対して，いつも先生が教室で「静かに」とどのように言っているかをアドバイスした。

・「本が置いてある」という表現に悩む子に対して,「その建物が持っている」という表現してみようとアドバイスした。

・「借りる」という表現に悩む子に対して,「手に入れる」という表現をしてみようとアドバイスした。

・「たくさんの本が見られる」と受け身（未習）表現を使おうとした生徒に対して,「読める」という表現してみようとアドバイスした。

・場所の名前を使っていいかという，柔軟な発想ができる生徒もいた。

このことから，各グループに対して教師が行ったアドバイスが，完成した文を通して，他のグループへ広がっていったものがあることが分かる。ただ，50分の中で教師のできることは限られているので，生徒の気づきや感心は，教師のコーチングと生徒同士の交流が作用しあったところから生まれたと考えるのがよいと思われる。

さて，第１時では，“library” という共通の語に全ての生徒が取り組んだが，第２時では，クラスの中で，４人１グループで10グループを作り，それぞれ異なる語（または語句）に取り組んだ。

baseball, horse, basketball, park, desk, computer, ice cream, bus, pencil, vending machine

生徒が作った全ての文を紹介したいが，紙面の都合上，basketballについて，各クラスの説明文だけを紹介する。

〔1組〕

・It's a kind of sports. We can play it in our school. We play it in gym. It's very popular sports. Many people likes it. Michael Jordan is a famous player of this sport. NBA is famous league. There are five people in one team.

〔2組〕

・It's a sport. It use a round ball. Its color is orange, and it has black lines. We play it in gym. It's popular in America. It isn't baseball. Boys and girls like it. Our school has its club.

〔3組〕

・It's a game. The game use a brown ball. We can use hands, but can't use feet. The game needs five players.

〔4組〕

・It's a sports. We played it when we were 1st grade. We can't play it without a ball. We play it in the gym. It's rule has 2 points and 3 points shoot. In America it's very popular. Many students liked it.

これらの文を見ると，文法の誤りはまだまだあるものの，basketballの形状や色，学校の生活での位置づけ，競技上のルール，海外での人気度などを盛り込みながら総合的に説明しようとしていることがわかる。昨年度の表現力に関する発達段階の研究で，生徒は「学年が上がるに従って，自分の身近なことからより広い範囲の複雑な物事について，表現するようになる」と作業仮説を立てたが，この文を通して見る限り，この作業仮説は的を射てるように思われる。

第1時の活動で生徒の中で育まれた問題解決に関わる経験が，第2時において，どのような変化として表れたのか。それは，第1時で個人が作った文の数と第2時で個人が作った文の数の変化を通して垣間見ることができる。欠席などの都合で回収できたシート数が異なることや，paraphraseする語や語句が異なるものの，個人の力で書けるようになった数が第2時でアップしているのが右の表から分かる。これは，第1時の活動を通して，paraphraseする方法や着眼点をグループやクラスの仲間の文から学び取り，次の活動に役立てた結果だといえないだろうか。

文の数	第1時における人数 (38人中)	第2時における人数 (34人中)
1文	2人	
2文	11人	1人
3文	12人	9人
4文	9人	9人
5文	4人	7人
6文		3人
7文		3人
8文		2人

授業者として上のような考察をしたのであるが，発達段階や問題解決などに関してドグマに陥らないように，様々な教科の同僚に授業を参観してもらって，コメントをもらっている。今回の授業では，5名の同僚からコメントをもらった。

【発達段階に関するコメント】（下線部筆者）

〔マクロ的視点〕　※「マクロ的／ミクロ的視点」は第47号紀要を参照のこと

・まわりに確認することをしないで，自分で考えた英文を発表する様子が見られ，自信がついてきてい

るんだと思いました。

・集中して聞いている様子。2年生の段階では，自分でものを創り出す，創造的好奇心が芽生えてくる時期かもしれない。(数学のときもそう思ったが…。)

〔ミクロ的視点〕

・文法力や語彙力がある生徒はどんどん先へ進めるが，そうでない生徒は1～2 sentenceでとどまっていた。一人でやるといってもとなりの子と相談していた（N子)。でも，やる気のあらわれであると思った。

・Y子とK子は書けていない。ただ，K子は電子辞書で調べ始め，まわりに伝える。F子は一文だけ書く。この三人は同じグループにいる。私の教科でもそうなのですが，課題に対してうまく考えを書けない生徒にはどのような対応をしているのですか？

・M男が“rent（借りる)”と言ったのに対して，S子が“can't buy”を提案。

・一人で説明文を書くとき，FさんとNさんは，教科書をパラパラめくり，文例を探しているようだった。Fさんは，教科書の2行目を記入。

・U君は，Kさん所有の電子辞書で分からない単語を調べる。

・Fさんが，H君所有の図書館発行カレンダー（定休日記入）を見ている。

・Kさんは，「かりる」を電子辞書で「いろいろあるけど…」とつぶやきながら調べる。

【問題解決力（英語は主に「表現力」）に関して】

・ワークシートの「2．グループ内の友人が書いた文で，感心したもの…」のところで，友だちのを見て「全然思いつかなかった！」と書いている生徒，言っている生徒がいて，学び合っているなぁ，そういうところからも表現力がついていくのかなぁと感じました。グループで説明文を完成させるときも，単語・構文について教えあったり，「Aくん！そう書いてしまったら，すぐにJim先生にわかってしまうよ！」とアドバイスし合っていて，よりよい表現にしようと努力している姿が見られました。

・自分たちが持ち寄った文のどの部分がよいのかということを話し合わせることで，的確な表現の仕方が身についていくんだろうと思いました。

・自分の考えと他の考えとのものを比較することで，表現力が少しずつ身についていくんだと改めて感じました。

・本がたくさん置いてある。→本をたくさん持っている。などの言いかえができるかどうかが，問題を解決するための「表現力」なのかなぁと思った。

(以下，同じグループで)

・U君が「『本を貸し出しているところ所』を付けたら」というと，Kさんは「『本を借りる所』だからいらないのでは…」という意見交換を行う。

・2台の電子辞書で，「貸す」「借りる」を別々に調べる。

・辞書にあった例文「この本は一週間借りられる」を見つけ記入する。

・教科書や辞書の例文などから自分なりの文を作ろうとしているように思った。正確さを求めているのかなぁ？

マクロ的発達段階に関してのコメントで，数学科の教諭が「2年生の段階では，自分でものを創り出す，創造的好奇心が芽生えてくる時期かもしれない。」と感想を述べてくれたのであるが，これは英語科で立てた作業仮説に新たな視点を提供してくれるものかもしれない。「創造的好奇心」が芽生えているならば，

生徒は，授業の中の活動で，単純なパターン化された練習だけでは満足しないはずである。先に述べた安井　稔先生の話しのようにinputは重要であるが，英語丸が浮かび上がる前にも，inputされたものを創造的に組み立ててoutputすることを生徒は望んでいるのではないかと思われる。

問題解決力に関してのコメントでは，生徒たちの学びの交流の場面を社会科の教諭が観察して具体的に伝えてくれた。授業者は，生徒からの質問に答えることやアドバイスをすることに追われて，生徒の様子をじっくり観察することがなかなかできなかったので，同僚の観察は，生徒たちの感想から伺えたが授業中の交流を裏付けてくれた。

最後に，この活動を通して印象深かったことを記しておきたい。それは，いつも授業になるとお腹が痛いなどで保健室へ行くある生徒が，嬉しそうに友だちと意見を交換していたことである。slow learnerであるこの生徒にとって，英文を作ることでは他の生徒よりは引けを取るものの，語をparaphraseするときの着眼点を述べることにおいては，他の生徒と対等またはそれ以上に授業に参加できたようである。今回の授業は，問題解決力，その中でも特に，表現力を高めることに主眼を置いて行ったのだが，そこに黄の糸を織り込むことで，意欲や関心を高めることにも繋がるということを教師として学んだ結果になった。

We miss Jim-sensei!! (part 1)

2年＿＿組＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

Jim 先生に，君達が作った「ある語」についての説明文を読んでもらいます。説明文がツボを押さえて書けていれば，Jim 先生が「ある語」を当てることができます。例にならって「ある語」の説明文を考えて書いてみよう。

【例】説明する語　apple

It's round. It's a kind of fruit. It's red.
We can buy it a ＿＿.

説明する語　library

1．自分ひとりで書いてみよう。

It has many kinds of books. We sometimes go there.
In summer, Many students go there and borrow books to do homework.
It is cool there. There are some old books.
One of it is in Izumino.

2．グループ内の友人が書いた文で，感心したもの・参考になったものを写しましょう。

We can read many books. It's silent.
It's in Izumino.
We can go there by bick and car.

〔感心したこと/参考にしたこと〕
・ある場所，とか，自分が思いつかない物がある，でびっくり
・だ沢

3．グループで説明文を完成させましょう。

It has many books. We can read and borrow many books there.
We must be quiet there.
It is in Izumino and Tamagawa.

4．他のグループの文で，感心したもの・参考になったものを写しましょう。

It isn't very noisy.
We can get some books in it.
The first letter is "L".
It's a big building.

〔感心したこと/参考にしたこと〕
否定文で表したりするのは思いつかなかったし，「borrow」が分からなくて「get」を使うのもすごいと思った
図書館を機能じゃなくて建物が単語としてとらえていたのもおもしろい

生徒ワークシート　2

We miss Jim-sensei!! (part 1)

2年＿＿組＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

Jim 先生に，君達が作った「ある語」についての説明文を読んでもらいます。説明文がツボを押さえて書けていれば，Jim 先生が「ある語」を当てることができます。例にならって「ある語」の説明文を考えて書いてみよう。

【例】説明する語　apple

It's a kind of fruit. It's red. It's round.
It's delicious. We can buy it at super market.

説明する語　library

1．自分ひとりで書いてみよう。

It has many kinds of books. We can read books there.
We can take but books there, but we can't buy books there.

2．グループ内の友人が書いた文で，感心したもの・参考になったものを写しましょう。

It's a large building. Many people use it. It's very quiet there.

〔感心したこと/参考にしたこと〕
「誰でも使える」という表現が分からなかったのですが，「Many people use it.」という表現がわかった。

3．グループで説明文を完成させましょう。

It's a large building. It's very quiet there.
It has many kinds of books. We can read books there.
We can take out books there, but we can't buy books there. Many people use it.

4．他のグループの文で，感心したもの・参考になったものを写しましょう。

We can listen to many CDs there.
We can borrow books there.
It's isn't a book store.
We can borrow (that one) → books.
Our school has it.
There are many people, because they can read books there.

〔感心したこと/参考にしたこと〕
習っていない単語をたくさん使っていてすごいと思いました。
「borrow」という単語や表現の仕方も分かりよかったです。
「wide room」→ないへや，また初めての表現もわかった。

生徒ワークシート　1

We miss Jim-sensei!! (part 2)

2年＿＿組＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

説明する語	horse

1．自分ひとりで書いてみよう。

It's an animal. We can ride it. It can run very fast.

2．グループ内の友人が書いた文で，感心したもの・参考になったものを写しましょう。

	〔感心したこと／参考にしたこと〕
It has a long tail.	体の形については、色は様々だし大きさも様々だけど、"しっぽが長い"ことは共通しているということになるほどって感心しました。

3．グループで説明文を完成させましょう。

It's an animal. It has a long tail. It can run very fast.
We can ride it. It eats grass and carrot.

4．他のグループの説明および説明している語

グループ1	グループ2	グループ3
It's an animal. It has a long tail. It can run very fast. We can ride it. It eats grass and carrot.	It's a kind of sports. We can play it in our school. We play it in gym. It's very popular sports. Many people like it. Michael Jordan is a famous player of this sport. NBA is a famous league. There are five people in one team. We play it with a large brown ball.	It's a sport. Its sport uses bat and ball. We often enjoy on TV. It isn't a softball. It's play outside. It's very popular in Japan and America.
説明している語 horse	説明している語 basketball	説明している語 baseball
グループ4	**グループ5**	**グループ6**
We use it every day. We study and on it. It's almost made of tree. We use it with chair. It has four legs, but it's not a table. What is it?	It's expensive. It's big and heavy, but it's small and light, too. We can use it our school. Yuki and Andy use it for e-mail in Sunshine one. All over the people use it.	It's a kind of sweets. Everyone eats it in summer. It's with corn. It's many kinds of tastes. Chocolate, vanilla, orange and apple... It's very cool. Everyone likes it.
説明している語 desk	説明している語 computer	説明している語 ice cream

(裏面へ)

We miss Jim-sensei!! (part 2)

2年＿＿組＿＿番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿

説明する語	えんぴつ

1．自分ひとりで書いてみよう。　with it → それを

You can write with it. You can buy it.
それを使って書くことができる　それを買うことができる
It's not a pen. それはペンではありません

2．グループ内の友人が書いた文で，感心したもの・参考になったものを写しましょう。

	〔感心したこと／参考にしたこと〕
We use it everyday.	えんぴつはペンとの違いをはっきりさせなければならなかったので、ちゃんとペンでないものだということや、それでできていることを書くと分かりやすいと思った。
We write a letter with it.	
(You write in black with it)	
It's usually made by wood.	

3．グループで説明文を完成させましょう。

It's a thing. You can write in black with it.
It's not a pen. It's usually made by wood.
You can buy it in this school too.

4．他のグループの説明および説明している語

グループ1	グループ2	グループ3
It's a sweet food. It's cold. It's many kind of tast for example is chocolate, vanilla and matcha. It's like a sherbet. We buy it in the island.	It has many kind of drink. Drink is hot or cool. We use it when we're thirsty. It's big, but it's not market. Our country has many it.	
説明している語 ice cream	説明している語 juice	説明している語 pencil
グループ4	**グループ5**	**グループ6**
It is an animal. It's in Kanazawa. It's in stock farm. It's in the sunshine!. It's sometimes brown. The cry "Hihi-n".	It's a sports. We played it when we were hot hands. We can't play it without a ball. We play it in the gym. It's rule has 2 points and 3 point shoot. In America it's very popular.	It's a very hot sport. We use a bat, glove and ball. One of the player is pitcher. It's popular in the U.S. Nine players play it.
説明している語 horse	説明している語 basketball	説明している語 baseball

It's tall. It's has long hair. It's runs very fast. It's one of Yeti's [illegible]
many students liked it
We always watch it on TV in summer.

(裏面へ)

5．3年生の実践

3学年では，表現力をつける取り組みとして“Small Talk”という，およそ2～3分の間あるトピックについて話を続けるという取り組みを2年生後半から行なってきた。現在も断続的に取組中である。

この取り組みは2年時と3年時では，方法を異にしている。最終的には「テーマ設定にあたって」のAの柱「スモール・トークのような瞬間的，即興的なやりとり。その場で瞬間的に考え，対話する」ための表現力を身につけるのが目的であり，3年時ではそのような取り組みを行なってきたが，2年時はそのための準備段階として，人前ではなすことや発表に慣れるため，Bの柱「書いて準備し，覚えて発表する」事を意識した取り組みとなった。ここでは3年時の取り組みを主に取り上げ，述べることとする。

(1) 問題解決力の位置付けと育成のための方策

“Small Talk”のような取り組みでは，問題解決力というのは「その場，その瞬間で判断し，適切な英語を話すこと」であり，「会話をできる限りスムーズに続けること」だと言える。そのためにそれぞれのトピックに応じた語彙，言い回しなども含めた，総合的な「表現力」が必要不可欠となる。総論の図の中に示されているように，生徒の中の問題解決力には様々な要素があり，この“Small Talk”でも「表現力」の他に様々な力が必要となる。例示すると，次に何を言えばよいか，どんな表現を使えばよいかなどを判断する「判断力」，どんな会話の展開になっても対応できる「臨機応変に対応する力」，会話を続けるために必要な話題，言い回しを引き出す「継続力」，相手の性格や好み，話し方などに合わせて自分の言いたいことをいうための「人と関わる力」などが考えられる。しかしながら，それらの力があっても自分の言いたいことを言える「表現力」がなければ，他の力を発揮できないまま会話が停止してしまうのである。

そこで，2年時には「様々な表現を蓄積していくこと」と「人と英語で話をする，人前で英語を話すことに慣れていくこと」をねらいとし，練習段階では原稿（台本のようなもの）はないが，発表に際しては原稿をもとにした会話を発表してもよい（ただし，原稿を持ち込んだ発表は不可）とした。

そして，3年時には「表現の蓄積」と「慣れ」という狙いを継続しながら，ペアをくじで決めるなどして，話し相手が発表の直前まで分からないようにし，台本も用意させないことで，「瞬間的，即興的なやりとり」を行なう力を養ってきた。

とはいえ，何の練習もないままいきなりその会話をするのではなく，まずある程度の語彙，表現をクラス全体で確認し，数人の相手と練習を積んだ上で発表に至る。語彙，表現を確認する際，2年時ではほぼ指導者が一方的に答えを与えていたのだが，3年時では英語で言えない語句，言い回しをまずクラス全体に持ち込む。例えば「『そうするとちょっと難しい』って何て言うの？」という質問をクラス全体で考える。別の生徒が「『そうする』＝『それをする』だからdo itでしょ。」と答える。そこで指導者が「でも，『そうすると』って言うのは「それをするとき」という意味か「それをするのは」という意味かどっち？」と聞く。最初に何というのかみんなに尋ねた生徒は「『それをするのは』のでいい。」と答える。「じゃあ『It is difficult for me to do it.』でいいんじゃないの？」と別の生徒が教えてくれる。さらに「『difficult の前に a little が要るよ』」とまた別の生徒が教えてくれる。このように，クラス全体で智恵を出し合って表現を共有していく場を練習の段階で意図的に設けることにより，「英語での言い方が分からない」という問題を全体で解決していくことができる，放っておいたりその表現をあきらめずにみんなに聞こう，という意識を練習段階で持たせるようにした。このことは学習者の表現力をつけることだけではなく，学習意欲の向上にもつながっていった。

このように，「3色の糸」のうちの「黄色の糸（社会化の糸）」を織り込むことは，問題解決のためのエッセンスなのだと指導者が改めて実感することができた。また，このときにもう一つ指導者が注意したのは，「言いにくい，もしくは習ってないような表現をできるだけ易しい表現に置き換えさせるためのヒントを少しずつ出して，生徒から答えを引き出すようにすること」である。指導者が答えをそのまま教えてしまうと，生徒は「自分達が習った易しい言い方に置き換えるために，一所懸命に考える」ことをしなくなる。実際の会話では指導者や辞書が常にそばにいたりあるわけではなく，何とかして自分の持っている智恵を総結集して相手を理解し，自分が言いたいことを伝えなければいけない。「易しい英語に置き換えられるよう，常に考える」ことを習慣づけることこそが，「瞬間的，即興的なやりとり」を可能にしていく非常に大切な要素である。また，易しい表現にparaphraseすることを考える生徒を育てていくためには，英語科の同僚指導者の指摘どおり「指導者の問題解決力」が問われているのであり，「より効果的なヒントの出し方，そのセンス」を研究しつづける必要がある。

(2) 小学校の英語活動から学ぶこと

前年度来「発達段階に応じた学びの在り方」を研究してきた我々にとっては，小学校での英語教育の内容を知ることは大切なことであり，効果的に生徒の力をつけていく上で，小学校のカリキュラムを考慮した上で中学校の授業計画を立て，実践していく必要がある。これまでに我々は附属小学校の授業を参観させてもらったり，中学校の授業を見てもらったり，年間指導計画表を交換するなどして連携を図ってきた。

小学校の授業を参観させてもらった中で常に感じたこととして，「英語を楽しく話せていて，意欲的な生徒が非常に多い」ということである。附属小学校では「子供が英語のシャワーを浴びる」ことに力点をおき，話す力，聞く力を主につけていく取り組みを行なってきている。その際に机，椅子を使わずに，子供達は床に座り，時には立って体を動かしながら英語を学習している。参観させてもらった授業ではどのクラスも活発で，子供同士の交流が見られる場面もあった。「間違いを恐れず，英語を話す事にためらいがない」小学生を見ていて，「中学生になったら他人を意識し始めて，話す事に躊躇が出てくるのはなぜだろうか。いつ頃からなのかな，授業のすすめかたにも工夫が必要だな。」ということを考えていた。思春期を迎える難しさもあり同じような実践はできないが，易しいことを方法を変えながら繰り返し教え，定着させていくことで英語を話しやすく，自ら志願して活動していけるような雰囲気を作っており，小学校の取り組みを見習わなければいけない。「話す」ことで問題解決を図る中学校3年生の取り組みには，そういった雰囲気作りは問題解決の推進力ななるものと思われる。

(3) 「問題解決のプロセス」と「問題解決力」の関係の枠組みの中での授業

問題解決のプロセスとして総論で示されている3段階「状況把握」→「計画立案」→「遂行」のうち，3年時の“Small Talk”の取り組みでは，会話そのものが3つの段階を全て含んでいるものと思われる。まず今回のトピックや話し相手を知ることで「状況把握」をし，会話の内容をある程度の練習を積んだ経験の中で「計画立案」し，会話を「遂行」する。ただしこれらの段階のうち，2段階目の「計画立案」をするための充分な時間は与えられない。ある程度の会話練習，語彙の習得を発表前に行なうという意味において「計画立案」の時間はある程度保障される面はあるものの，相手が直前に決まることによって，相手に応じた質問や答え，相手の話し方やペースにあわせた自分の話し方

などをその場で「計画立案」する間もないうちに「実行」せねばならないという難しい側面も併せ持っている。

(4) 取り組みの経過

① 2年時

昨年度までは発達段階を考慮し，練習の段階で工夫をし，人前で発表する時に感じる抵抗感を少しでも減らすための取り組みを行ない，まず「瞬間的・即興的なやりとり」を可能にするための土台作りを行なった。トピックは2年時には「朝食」「夕食」「学校生活」についてペアで話をした。

1時間目では，まず3時間の流れを説明した。特に，3時間目の発表で相互評価を行うことと，その項目「声の大きさ」「聞きやすいスピード」「アイコンタクト」「日本語を使用しないこと」「英語らしい発音」の5つを伝えた。内容だけではなく，会話中の姿勢（attitude）も意識させるのがその目的である。そして最初に原稿を書く。会話によく使われそうな語彙を一覧表にしてまとめ，資料として渡した。まず始めに相手に聴きたいこと，自分が答えそうなこと，会話の流れを考えながら自分で考え，書く。次に，その原稿を元に2～3人の相手と会話をする。その会話の合間に，参考になる表現をメモしたり，うまく答えられなかったことを調べたりする。授業の終わりにそれらのメモを見直し，整頓し次の時間に備える。

2時間目は，1時間目にまとめたメモを元にさらに2～3人の相手と話をする。さらにメモをとり，調べ，言えることを増やす。次に，くじで会話のペアを決め，2人でおおよその会話の内容を決める。この段階では会話内容を書かせない。台本のようなものを作らせたくなかったので，時間も5分程度しかとらなかった。そして残った時間で，実際に2人で会話を1度行なった。時間のあるクラスは4人組になってお互いのペアの会話を聞かせ合った。授業の最後に次時の発表順を決めた（志願がなければくじ引きで）。

3時間目で発表を行なった。聞く生徒は，会話の内容を簡潔にメモし，発表後に，発表したペアに対して，聞き取れなかったことや内容に関する質問をした。その後で5つの評価項目を評価した。

② 3年時

3年時で目指したのは，「瞬間的・即興的なやりとり」であり，人前で発表することや会話することに慣れていくことに重きを置いた2年時とは進め方も違うものとなった。4～7月のそれぞれのトピックでの取り組みに共通して言えることは，「会話の台本をペアで作らず，その場で発表する」ということである。本来，会話に台本などあろうはずもなく，即時的な判断力，自分の思っていること，伝えたいことをやさしい英語で言う表現力を培う上では，台本はあってはならない。お互いの会話練習の中で学んだことを書きとめることはあっても，発表ではそれを見てはいけない，という条件をつけた。また，発表の際にはその時その場でくじ引きで話し相手を決めるという条件もつけた。それらの条件提示によって，生徒達にはよい意味での「開き直り」を期待しながらこの取り組みを進めていった。

[1] まず，4月に「クラスにいる友達」について，ペアを組ませて，お互いのことをクラスのみんなの前で発表した。これは会話形式ではなく，スピーチ形式で行なった。「アイコンタクト」や「声の大きさ」などを意識しながら取り組ませることがねらいで，練習として1時間，クラスの数名の友達（第3者）のことをお互いに話してから，次の時間から連続して，授業開始の5～10分ほどを取って，自分のパートナーのことを発表した。

[2]　5月に，現在完了の復習というねらいもあり，「Have you ever been to ～ ?という疑問文を会話の中に織り込む」という条件つきで，「行ったことのある所（国），行ってみたい所（国）」について，会話を行なった。このときに必要な語彙は国名，地名をクラス全体で挙げるにとどめ，ペアを数回組替えながら会話練習を行なった。ペアの組換えの間に，言い方が分からない表現をどう言うかを指導者が教え，それらを確認しながら，また生徒同士もしくは指導者と生徒によるデモンストレーション聞き，それらを参考にし，有用な表現を取り入れながら会話の質，量ともに増やす事を目指した。発表は時間の制約があり，このときは各クラス全員に発表の機会を与えられなかった。

[3]　6月に「趣味」についての会話を行なった。このときはWhat's your hobby? My hobby is reading books. などの基本的な疑問文とその受け答えの文を2～3つだけクラス全体で確認し，ペアを数回組み替えながら会話練習をした。言いにくい表現などの確認もしていったのだが，このトピックで英語で会話を弾ませることは生徒達にとっては難しかったようである。自分の好きなことなら大いに話せるであろうという指導者側の期待はあったのだが，いざ取り組ませてみると会話にあまり発展性がなく，「読書が趣味で，好きな本といえばハリー・ポッター」というような，事実には相違ないのだが，似たような会話になる生徒が多かった。指導者側の工夫も今一つ足りなかった面もあり，生徒の英語を話す力を評価しにくい取り組みになってしまった。生徒同士の発表も5月より少ない数ペアにとどめた。

[4]　7月に「夏」についての会話を行なった。表現の確認，デモンストレーションを聞く，ペアを数回組み替えるというスタイルは残しつつ，新しい取り組みを試みた。1つは，「夏」のイメージを喚起する，もしくは会話に必要な語句を約30だけプリントにまとめて与え（p.215資料3参照），それらの語を授業のはじめにペアで復習するようにした。もう1つは，生徒が英語に直せなかった語句や言い方を指導者が教えてしまうのではなく，クラス全体で考える場面を多く設定していったことである。特に，単語ではなく，生徒達は文が作れないことが多いのだが，それはどんな文なのか生徒に尋ねてみると，以外にも簡単な表現で言えるもの，中学校3年生6月までに習った英語で言えるものが多かった。優しい言い回しを考えるためのヒントを指導者側から与えるのだが，言いたい表現にたどり着くまでの考え方を生徒達一人ひとりが聞くことによって，paraphraseするコツのようなものをつかんでいってほしいと願っている。それこそが実際の会話の中で大いに生きてくると考えている。以下は，今年度校内の研究授業で7月に行なった「夏」についての“Small Talk”を行なった授業の指導案である。

3年2組　英語科　学習指導案

平成17年7月7日(木)
6限　　3年2組教室
指導者　　小川　正清

1　単元名（題材）　Small Talk　“Summer”

2　目　標

・実際の会話で，自分の知っている語彙の中でその場に対応をする「即座の表現力」を身につける。
・「夏」に関する語句，表現を習得し，各々が「夏」という話題に関しての初歩的な会話ができる。
・短い会話から始め，徐々に内容を発展させながらコミュニカティブな会話を継続して行うことができる。

3　評価の観点および規準

①コミュニケーションへの関心・意欲・態度

・「夏」という話題について，積極的に相手とコミュニケーションを取りながら継続的に会話を行なっている。

②表現の能力

・「夏」という話題について，相手に応じで適切な表現を使い会話を進めることができる。

4　指導にあたって

【教材観】

2年生の後半から，「英語で話せる話題を持ち，その話題でなるべく多くのこと継続して話し，積極的に自己表現をしながら相手への理解を深める」こと，すなわち実践的な話す力をつけることを目的として，“Small Talk”という取り組みを行なっている。「朝食」「夕食」「学校生活」「家族や友達」「行ってみたい所（国），行ったことがある所（国）」「趣味」という話題で続けてきており，今回の話題は「夏」。今からの季節ということもあるが，話題の広がりが期待できるトピックであろう。「夏」の思い出について話す生徒もいれば，今年の夏の予定について話す生徒，普段の夏の過ごし方や，夏に関わる好き嫌いなどを話す生徒等，多様な会話が予想される。その分，既習の語彙だけでは言いたい事はおそらく言い切れないと思われるので，ある程度のものは準備して，ウォーミング・アップの段階で与えていき，会話のヒントとしたい。ただ，ややもするとこちらから語句などを与え過ぎることで生徒が考えなくなり，答えをねだるような状態になりがちである。そのような状態を避けるため，ヒントは小出しにしていきながら生徒が言いたい表現にたどり着けるような支援を行いたいと考えている。

昨年度の「発達段階に応じた指導の研究」において，本校の生徒は「学年が上がるに従い，より広い範囲の，より複雑な物事について表現するようになる。」という傾向を持つことが分かっており，会話の題材選びも身近で話しやすいものから徐々に広く，多様な表現を伴うものにしていきたいと考えている。また，生徒はどちらかといえば話すことより書くことのほうを好む傾向があり，それは学年が上がるに従って強くなっている。また，話すことに対して自信が持ちきれず，話す活動の発表を好まない生徒が多いという現実もある。ただし，ひとたび授業が始まってしまうと，生徒達はペア活動などの取り組みにおいて，積極的に話す姿がよく見られるので，話すこと自体にはそう抵抗がないようである。昨年度は「発表に対して自信を持つ，抵抗感を減らす」という目的でグループ内での練習や発表を経た上で，全体での発表をするという段階的な指導を行なったところ，ある一定の成果が見られた。今年度も指導の際にはそのような配慮をしていきたいと考えている。

【生徒観】

どちらかといえば大人しいクラスである。全体の声は決して大きいわけではなく，反応はやや遅い。また授業を引っ張っていけるような，声の大きく反応の早い生徒が少ない。ただ，授業に対する取り組みを見れば全体的に真面目で堅実なクラスである。個で行なう作業は黙々と集中して行なう生徒が多い。そんな中で授業に対する意欲，集中力を失いつつある生徒が数名おり，言葉かけや支援，時には注意も必要となる。この題材は主にペアで，もしくは少人数で行なう会話が中心なので，クラスの生徒同士の結びつき（黄色の糸＝交流の場）のなかで，互いに高め合うよう意識させたい。

【指導観】

今年度英語科では「表現力」の育成を図ることで問題解決力をつける，という位置付けで，「即座の表現力」を養うことを目標に掲げ，この“Small Talk”を行なっている。昨年度は用意された原稿を

もとに発表を行なっていたが，今回はある程度の語句，表現だけを事前に与えるにとどめ，書く作業はメモ程度とする。実際の会話はメモを見る事はないので，今年度は原稿なしで会話を行い，自分で文や会話を組み立てる表現力を養いたい。しかしながら，指導の際にはただ話題を与え，機械的に会話をさせるのではなく，ある程度の語句，表現を押さえながら生徒達の語彙が少しずつ増えていくような段階的な指導を行なっていければと考えている。また，会話は生徒同士でのみ行なっていてもなかなか向上しない場合があるので，指導者と会話を行い，例を示していくことも重要であろう。また，「即座の表現力」として予想しなかった質問や会話の流れになったり，自分の話しにくい話題になった時，いかにその場で対応できるかを見極め，うまくいかない生徒に対しては指導者の支援だけではなく，周囲のアドバイスを聞いたり，自分自身で切り抜けていくための考える時間を適宜取るなどしたい。また，コミュニケーションを継続させる相槌，つなぎの語句，ジェスチャー，アイコンタクトなども併せて指導できればよいと考えている。

5　指導計画および評価計画（総時数３時限：不連続の時限）

	評価計画
第１次　夏についてペアで会話を行なう。（３時間）	
第１時　夏についての語句，表現の習得，会話の練習。【本時】	①②
第２時　夏についての表現の習得とペアでの会話。発表の準備	①②
第３時　夏についての会話の発表。	①②

6　本時の学習

(1)　題材名　「夏」という話題での会話。

(2)　ねらい

・実際の会話で，自分の知っている語彙の中でその場に対応をする「即座の表現力」を身につける。

・「夏」に関する語句，表現を習得し，各々が「夏」という話題に関しての初歩的な会話ができる。

・短い会話から始め，徐々に内容を発展させながらコミュニカティブな会話を継続して行うことができる。

(3)　評価の観点及び規準

①コミュニケーションへの関心・意欲・態度

・「夏」という話題について，積極的に相手とコミュニケーションを取りながら継続的に会話を行なっている。

②表現の能力

・「夏」という話題について，相手に応じで適切な表現を使い会話を進めることができる。

(4)　発達段階に応じた学習活動について

・「学年が上がるに従いより広い範囲の，より複雑な物事について表現をするようになる」という本校生徒の傾向を踏まえ，本次で「夏」という題材に取り組ませることにした。今からの季節ということだけではなく，身近でありながら広く様々な内容の会話が期待できる。会話が単調にならないよう，タイミングの良い，生徒の思考を引き出せるような働きかけをしていきたい。

(5) 本時の展開

学　習　活　動	指導者の指導・支援及び留意点	評価規準及び方法	時間
1　Greetings ・あいさつ，先生の質問に英語で答える。	・元気な，話しやすい雰囲気を作る。		2分
2　Bingo **・bingoを行なう。** **JTEの質問に即答する。**	**・答えがなかなか出てこないときは質問を変えるなどして生徒から答えを引き出すようにする。**		6分
3　Warm-Up ・「夏」に関する語をどんどん言う。	・未習語が挙がったらその場で意味を確認する。日本語で挙がったものは英語に直す。		3分
4　Vocabulary ・前時に使用した，「夏」に関する語句のプリントで語彙のチェック。	・ペアでチェックを行なわせる。初めから完答できなくても良いことを伝える。		6分
5　Thinking ・「夏」について話す事を考える。	・座席を立ち歩かず，近くにいる生徒同士で相談しても良いこととする。	◎「夏」という話題について，積極的に相手とコミュニケーションを取りながら継続的に会話を行なっている。(①関心・意欲・態度)[観察]	3分
6　Small Talk **ア生徒同士での会話。** **イ JTEと生徒の会話** **ウ質問** **＊ア・イ・ウを数回繰り返す。** **途中でア→イ→ウという順番にならないこともある。**	**・アに関しては，会話が途切れて沈黙している場合，教えあってよいこととする。また疑問文に対する答えを最低2文以上にする，というような条件を与えるなどして，会話を継続できる方向へ持って行く。** **・イの場面で生徒達への例示となるような会話を行う。** **・ウの場面で，難しい事を習った表現で何とか易しく言い換えられる機会を生徒に与えたい。** ・机間指導しながら個々に支援する。	◎「夏」という話題について，相手に応じで適切な表現を使い会話を進めることができる。(②表現の能力)[聴き取り]	25分
7　Writing ・会話の内容をプリントに記入する。			5分

授業の中での生徒同士の，もしくは指導者と生徒とのやりとり

(以下，J = JTE　S = student)

① J : What do you imagine from the word summer?"
S :“クーラー”
J :“クーラー” is a Japanese. How do you say it in English"

S：“エアコン”

J：“エアコン？”

S：Air computer?（一同笑）

J：Air computer! 空気コンピューター?

S：Air company?

J：Air company? 空気仲間？ 空気会社？ No.

S：Air controller.

J：Air con-di.....

S：Air conditioner!

J：Right!

【メモ】まずはこういった些細な語の質問が出てくる。あまり全体の場で取り上げすぎると時間はないのだが，楽しい雰囲気作りの一助になった。夏に関する語をあげさせる最初の段階である。

② J：Do you have any questions? 何か言いたくても英語でいえなかったことある？

S：きらい。

J：きらい。How do you say it?

S：Hate.

J：Hate, that's right. でも，「好きじゃない」って言い方もあるよね。

S：Don't like.

J：そう。Don't like. Hateが分からなくてもdon't likeで切り抜けられるよね。

【メモ】易しい表現に置き換える典型的な例である。ただし，質問した生徒はdon't like よりも強い意味で「嫌い」と言いたかったようである。

③ S：合宿

J：合宿。塾での勉強の特訓という意味での「合宿」という言葉は英語にはない。じゃあどう言おう？

単語で考えるより，文で考えた方がいい。「合宿」という語を使って何て言いたかったの？

S：合宿で長野に行った。

J：合宿で長野に行った。簡単な言い方でいいよ。さあみんななら何て言う?

S：I studied in Nagano.

J：これからの予定のことらしいよ。going を使おう。

S：I'm going to study in Nagano.

J：泊まるというニュアンスが出てこない。泊まる，滞在する。

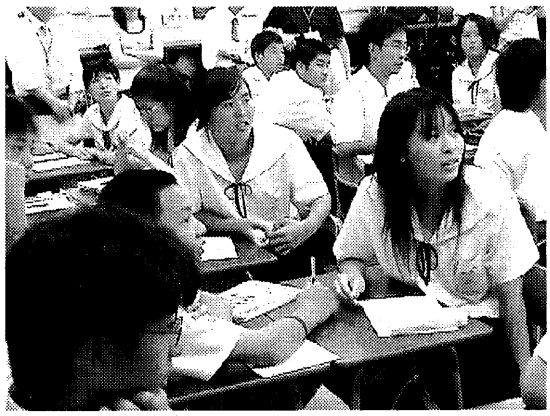
S：Stay.

J：そう。Stay. 5日間

S：For five days.

J：勉強するために。

S：to study. I'm going to stay Nagano for five days to study.



J ：hard なんかを最後につけてもいいね。

【メモ】「合宿」は前もって生徒が話題にするという予測が立っていたので，指導者は前もって調べることができた。campingなどの英語があったが，paraphraseの絶好の機会として，生徒に考えさせる場面を作ろうという狙いを以って授業に望んだ。

④ S：花火大会。

J ：花火大会。How do you say it?

S：Firework

J ：OK. 大会。Championshipじゃあちょっとおかしいよね。お祭りだよね。

S：Festival. Firework festival.

【メモ】大会＝お祭りという発想は少し考えてみると出てきそうなものだが，実際の会話ではそうは行かない。festivalという単語を使わなくても，文によっては「花火を見に行く」（後述の同僚からの意見参照）というアドヴァイスの与え方もできればなお良かった。

⑤ J ：お墓参りをする。お墓は?

S：Grave.

J ：彼らはお墓参りをする。Program 2で習ったよ。お墓を訪れる。

S：Visit. They visit their family graves.

【メモ】3年生の教科書で習った表現が，案外会話になると出てこないものである。やはり自分で思い出して実際に話して，それで会話が成り立つという経験をしてはじめてその表現が定着するということを実感した。

⑥ 同じ授業を他クラスで行なった時，以下のようなやりとりがあった。

S：「蚊に刺される。」って何て言うの？

J ：蚊に刺される。「～される」っていうのは「受け身」と言って，まだ習ってないんだ。でも今まで習った言い方で言えるよ。どう？（間）そうか。じゃあ「蚊が刺す」って言ってみたらどう？蚊は？

S：Mosquito.

J ：そう，Mosquitoes. 次に「刺す」なんだけれども，まず誰を刺すの？

S：自分。

J ：じゃあ英語で「私を」は？

S：me.

J ：そう。あと問題なのは「刺す」。実は「刺す」という意味に近い動詞を1年生で習っているんだ。

S：えー？何だろう？

J ：「タコマの牧場で」由紀は何か食べていたよね。

S：サンドウィッチ。

J ：そのときの食べ方。

S：がぶっと食べる。あ，biteか？

J ：Exactly.「刺す」という言い方，英語ではbiteを使うんだ。だから「蚊が私を刺す」は？

S：Mosquitoes bite me.

J ：Right.

【メモ】このやりとりも，夏から連想する30の語彙のプリントにmosquitoを入れた段階で予測してい

た。

生徒達に「この単語がこんな意味を持つのか！」という驚きを与えたかったので，ねらいどおりのやりとりになった。

⑦ 以下の会話は，語彙の練習だけを行い，会話の練習が全くなされていない状態でS1（女子）とS2（男子）が夏について話した。ただし，会話の最初の部分がよく聞き取れなかったので省略した。また，これは生徒同士の会話なので，文法的な誤りもあるがあえてそのままにして掲載した。

S1 : Did you go swimming last summer?

S2 : Yes, I did.

S1 : Where did you go to swim?

S2 : I swimming Kenmin Kaihin Pool

S1 : Did you have a good time there?

S2 : Yes, I did. How about you?

S1 : I didn't go swimming last summer. I want to go swimming this summer.

S2 : What did you do in summer vacation?

S1 : I went to Nagano twice. It's Shizentaiken and Nokai no Gasshuku.

S2 : Was it good?

S1 : Yes, it was. Do you like to swim?

S2 : Yes, I do.

S1 : Do you want to go swimming this summer?

S2 : Yes, I do.

S1 : Do you like swimming pool or sea?

（S2が答えようとして考えている所で時間切れ）

【メモ】この会話で特徴的なのが，S1の生徒が何とか水泳の話題で会話を続けようとしているのに対して，S2の生徒はやや受け身で，答えることで精一杯のようだった。ちなみにS1の生徒は英語が得意で成績も優秀，S2は英語は嫌いではないが苦手意識をもっている生徒である。語彙彙を少し与えられているだけで，会話内容をあまり考える時間がないと，英語が得意なS1でも他の話題（S2が食いついてくるような話題）にまで思いが至らないようである。

ただし，同じトピックで他のクラスメイトと話していくうちに会話表現は蓄積され，少しずついろいろな切り口で会話ができるようになっていく。

⑧ S2が練習を経て，発表。その場のくじ引きで決まったパートナーS3（男子，成績は中の上，英語は得意でも苦手でもない）と原稿などを一切持たずに会話した。

S2 : Do you like summer?

S3 : No, I don't.（間）How about you?

S2 : I like summer because I like hot. What are you going to do this summer?

S3 : I don't have any schedules, but I want to...to go abroad.（間）How about you?

S2 : I... I... I will study very hard. Do you like watermelon?

S3 : Yes.

S2 : What did you do last summer?

S3 : I studied very hard last summer. How about you?

S2 : I played video game every day. What do you do in your free time?

S3 : I... I read many books. (長い間) What did you do summer ?

S2 : (沈黙)

【メモ】⑦の会話と比べて，共通点がいくつかあった。会話にかかった時間はそう短くないのだが，沈黙や間が多く，内容はそれほど充実，発展しなかったことである。相違点は，S2がある程度詳しく（２文以上で）質問に答えようとしていること，相手にいろんなことを状況に応じて尋ねるための疑問文を少し言えるようになっていることである。疑問文では生徒は安易に“How about you?”と聞くことが多いし，あいづちも“Me, too.”ばかりになってしまい，会話が単調で発展性のないものになりがちだが，S2はその状況からは一歩抜け出しつつある。この紙面では分からないが，反応のスピードも最初のS1との会話より速くなっている。

⑨ S1が練習を経て，発表。その場のくじ引きで決まったパートナーS4（男子，成績は中の上，英語はやや得意）と原稿などを一切持たずに会話した。

S4 : Do you like summer?

S1 : Yes, because I was born in July. How about you?

S4 : I don't like to be hot.

S1 : What are you going to do this summer?

S4 : I'm going to study hard. How about you?

S1 : I want to go to Tokyo to go shopping. Where do you want to go this summer?

S4 : I want to go to Tokyo because it's interesting.

S1 : What are you interested in Tokyo?

S4 : I'm interested in.....I'm interested in go shopping.

S1 : What did you do last summer?

S4 : I went to a swimming pool. How about you?

S1 : I went to Nagano three times.

S4 : What do you do in your free time?

S1 : I went there with my family, next, with my juku friends, and next, with my school friends. Three times. What food... What's your favorite summer food?

S4 : I like watermelon. How about you?

S1 : Me, too.

JTE : Thank you, go back to your seat.

S4君，実は会話が途中かみ合わなくなったということ，S2さん，気付いた？

S4 : (うなずく)

JTE : どこでかみ合わなくなったか分かる？

S4 : (うなずく)

JTE : S4君，そこは君が会話をコントロールしなくちゃな。“Sorry, I didn't mean it.（そう言いたかったんじゃなくて...）ぐらいのことを言えればよかったんだけど。まあでも，君は「ああ，さっきの続きを言っているんだ」と分かってだまって聞いていました。それはそれでいいんですが（会話に支障がないという意味で）「ひまなときに何をしてるか」って聞いたんだよね。

S4：（うなずく）

S1：え，うそぉ？そんなこと言っとった？Three timesじゃなくてfree timeだった？

JTE：うん。ちょっとS4君の声がくぐもってたからな。会話はなんとなく成り立ってしまったけど，S2君がそのことを判断して流れを上手くもっていってくれたらなあ，と思いました。

【メモ】S1は⑦の会話に比べて相手の反応が良いことも手伝って，会話をテンポよく進めていた。水泳の話題を話してばかりの前回と比べ，相手の話題に合わせて会話ができている。S4は普段からあまり話すことが得意ではないせいか，How about you?という質問が非常に多い。しかし質問を聞き返してくれることでS1は自分が提供した話題を継続して話すことができている。会話⑧と同様，この紙面上からは分からないが，S1の会話のテンポはよくなっている。長野に行った回数を正確に思い出して２回から３回に増えていたり，「自然体験」という言い方が前回分からなかったのでI went there with my school friends.とS1なりに考えて言っている。

しかし，JTEが会話のあとでコメントしているように，会話の終わりに近い部分がかみ合っていない。S4の機転を次回以降に期待しているが，そうなっていくにはいくつもの要素が必要となる。まず相手がなぜ自分の質問に対してそんな答え方をするのかということを即座に考えなければいけない。そして「聴き取り間違えている」と認識できるか，さらには「あ，free time と three times を聞き間違えたのか」と認識できればなおよい。ここでは残念ながら修正されないまま会話は終わってしまったのだが，S4が状況を分かってもらうために簡単な英語，例えば Sorry, I said, “What do you do in your free time?” などと言うことができればよかった。ただし，会話の流れの中で突然自分の予測と違った質問が出てくることも充分ありえる。実際の会話では何が起こるか分からない。それぞれの状況を，自分の話せる英語で何とか切り抜けられるような力をつけたいが，そのためにはこのような失敗が起こった時こそ指導のチャンスだと考えている。ただし，次回に生きるような指導がこの場でできたかといえば疑問である。そういう意味では，同僚の同じ英語科の教師が言うようにそういった場面でこそ「指導者の問題解決力が問われている（次ページ『☆授業全般に関して』参照）」のであり，今後よりよい指導ができるよう，研鑽を続けなくてはならない。

授業を参観した同僚からの生徒の見取り，問題解決力に関わる考察。

【マクロ的視点】クラス全体や学年全体の発達段階について観察して

・普段おもしろくないかなと思っていた生徒もけっこう取り組みに参加していた（長いと飽きている感じもしたが）。

・質問がすばやく出たり，指導者の質問にすばやく答えたり，英語で普通に質問するなど自然に英語を使えている生徒がいる。

・いろいろな質問を安心してクラス全体の前で行なっていた。

・３年生なのに夏に関する語がどんどん出てきていいなあと感じた。笑顔もよく出ていて（生徒の）話しやすい雰囲気が教室の中にあると感じた。ペアの学習も男女，雰囲気よく行なっていた。

・楽しんでやっている…男女で組んでも表情が良い。集中力がある，あのざわつきの中，２人でペアを組んでコミュニケーションできていた。

・summerに関する未習語を学習している時，食いつきが良い。難しいものにチャレンジしようとする

発達段階にあるような気がする。

・反応が全体的に大人びていると思う（変な“ちゃかし”が入らない)。やる時は集中してやっている。

【ミクロ的視点】生徒個人の様子を観察して

・Oさん…英語で会話を楽しんでいた。

・自分の頭の中に思い浮かんだ日本語を，安易に（すぐ）先生に英語に治してもらおうとする生徒がいたが，自分の知っている単語や，習ったことから会話文を作ることが，このような生徒にとってとても難しいと感じた。それでも，何も見ずに，紙にも書かずにどの生徒も会話しようとしている姿，意欲が見られ，こういう姿が表現力をつけるために大切なんだなあと感じた。

・A君　…ペアの女子が積極的だったので，それに引っ張られるようにして活動していた。油断をすると机の上の文房具でいたずらをしていた。茶化すような言動は本人のキャラクター（照れ隠し）か？

・Bさん…表情が硬い。2人目以降は表情が少し和らいだ（相手による?)。真面目に取り組んでいた。声は小さい（自信がないのかな？)。

・C君　…ペアの女子が明るい子（1人目）だったので，しっかり活動していた。

・D君　…1人の時間はほおづえをついたりあくびをしていたが，ペアになってからは受け答えはしていた。

・先生の言うことを聞いている。単語の練習をしているとき「先生○○って言ってたよな」という風な発言をしている。意欲的。

・作業が進むにつれて，意欲が高まってきているように思う。

☆問題解決力に関して（英語では「表現力」)

・生徒の表現力を引き出すために指導者からのお手本や他の生徒からの質問を引き出すこと（みんなで考える場面)，本時の目標を生徒に示してしまうこと，指導者と生徒との会話など，大切なことがたくさん含まれた授業だと感じた。Small Talkを3回繰り返し，1回目より3回目の会話の方がよりよい表現となるように思考が引き出せるよう，3人とかわりばんこに話すという工夫がよかったと思う。

・自分の思ったことをいかに伝えるかということで，日本語で考えていてもなかなか思ったように言語化できない場面もあったが，ヒントをもらいながら考えて表現を繰り返せたと思う。ペア同士で助け合う姿があってもいいかな？

・一人が話題に詰まると，パートナーが次の話題を提供して助け合う場面が見られた。

・既習の知識と言いたいことが結びつく場が，授業の中で見られた。

☆授業全般に関して

・「花火大会」や「お化け屋敷」のような名詞的なことばかりでなく「文の表現」を取り扱えるとよかったと思う。

例　A:I enjoy Hanabi Taikai every summer.
　　B:Hanabi Taikai?
　　A:We watch a lot of beautiful fireworks in the Sai River.

こんなふうに説明する（festivalという語を使わずに）ことでもいいかなあ？

・タイミングよく生徒の反応が出たり，指導者の進め方がリズミカルでテンポよく進んでいき，見習いたい。絶えず生徒と会話をしながら授業を進めていてよい雰囲気だと感じた。

・指導者の問題解決力が問われる授業だったと思う。

(5) これまでのまとめと今後の課題

① 成果とまとめ

・継続した取り組みの結果，相手に尋ねることに慣れてきた。疑問文を作るスピードは，会話をすればするほど上がっている。指導者から先に疑問文を教えて使わせるようなことが減った。

・相手への応答が短い１文だけになることがよくあったが，２文以上詳しく答える習慣がつきつつある。そのほうが会話を継続させやすいということを生徒達は実感できるようになってきた。

・自分が言いたいことを英語で言えないとき，当初は安易に指導者にすぐ聞く生徒が多かったが，友人とともに考える姿勢，もしくは自分で何とか切り抜けようとする姿勢が見えるようになってきた。

・他のペアや指導者と生徒の会話を聞いたり，自身がいろいろな生徒と会話を積み重ねたりすることによって，話題に広がりができ，うまく話が続かない時の切り抜け方（話題を変える，自分のことを引き合いに出すなど）が上手くなっている。また，以前に比べて他者の会話から学ぼうという意識がまった。

・トピックや相手にもよるが，生徒達は会話のやりとりを楽しめるようになった。会話練習を苦に感じている生徒は減っている。発表時は緊張して会話を存分に楽しむことはできないのはある程度やむをえないのだが，発表に対して少し自身を持てるようになってきている。

② 今後の課題

・自分が言いたいことを，易しい表現に置き換えて話すことが不充分である。このことは英語を話す上では当面の課題であり，地道に積み重ねていくより他はないと考える。

・自分の不得手な，あまり興味のない話題に対しての反応はあまりよくない。会話が途切れて沈黙が続いたり，日本語が入ってしまったり，内容に乏しい会話のまますぐに終わってしまうこともある。

・生徒達は会話の内容に気を取られて，声の明瞭さ，聞きやすいスピードなどへ意識が及ばないことがしばしばある。発音や発声が不明瞭であったり速くて聞きづらい英語を話す生徒達には，相手への配慮は会話の内容だけではないことを意識させたい。これは，指導者も気をつけなければいけないことで，常に生徒を観察し注意を促したい。

6．おわりに

今年度，本校では，小・中連携を見据え，生徒に育成すべき重要な［確かな学力］を「問題解決力」と位置づけ，その枠組の中で教科教育を実践してきた。英語科では，「表現力」を「問題解決力」の一部ととらえて，この力を主に取り扱いながら研究を進めてきた。

１人１人の生徒の問題解決力（英語科では，表現力）は，各自の知識・技能，センス・才能，そして経験を基礎として成り立ち，「問題解決（表現）」をする経験を積み重ねることによって，さらに高い「問題解決力（表現力）」を身に付けていくことになる。

英語科で取り上げた問題解決力である「表現力」を考えると，体育のような技能教科と似ていることに気付く。つまり，「教師は，生徒のセンスを引き出し，基礎体力（＝知識）をつけさせる。生徒は基礎体力（＝知識）を増しながら，（表現の）技能を身に付けていく。」のである。

さて，英語科では義務教育９年間の教科教育を考えるために，６年生を中心に小学校の授業を参観してきた。そこでは，授業の終わりまで，様々な方法で一つのパターンの文を繰り返し練習していたが，児童

は飽きることなく活動に参加していた。発達段階を考えると，このような活動ができるのは，せいぜい中学1年までで，中学2年では無理ではないかと考えた。

このような発達段階についての考察から，表現力を育てるために，中学1年は，基礎・基本づくりとして，できるだけ多くの知識を与えるのにふさわしい時期であると考えた。この時期は，問題解決のために教師が「知識を与える」動きが多く，「表現力・イメージ力・他と関わる力といった問題解決力に働きかける」動きは少ない。中学3年の時期は，その逆で，教師の「表現力・イメージ力・他と関わる力に働きかける」動きが多くなり，「知識を与える」動きは少なくなっていく。同様に，この中学1年の時期は，会話のstrategyを繰り返し練習するのにも向いており，この時期にそれらを身に付けておくのが有効だと考えた。発達段階と照らし合わせて，それが正しいものであるのかを今後も確かめていかなければならない。

今年度の研究では，スモール・トークを問題解決の最終的な課題とし，1年のOne-Minute Talk，2年のparaphraseの練習を，スモール・トークへとつなげていこうと考えた。しかし，実際にこの3つの活動が上手に1本につながったわけではない。これらの学習活動を経た3年生が，スモール・トークの場で表現力を十分に発揮できて初めて，この3つの活動が表現力を高めるために有効な手段であると言えるのである。検証を今後の課題としたい。

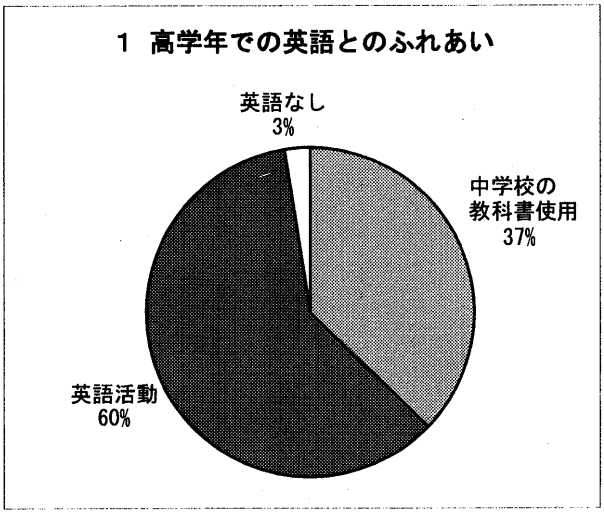
英語科では「問題」を設定する場面を，A（瞬間的・即興的なやりとり），B（時間をかけて計画的に行うもの），C（ある程度パターンが決まっている会話）の3つとしたが，これらをどの学年のどの時期に実施していくのがよいのかをさらに探っていきたい。また「問題」の設定を，1年では単純なもの（単語の入れ替えや，会話中に入る表現を考える），2年では少し複雑なもの（単語を言い換える），3年では複雑なもの（総合的な表現力を発揮して自由に会話する）としたが，発達段階的にこれでよいのか，を検証していきたい。

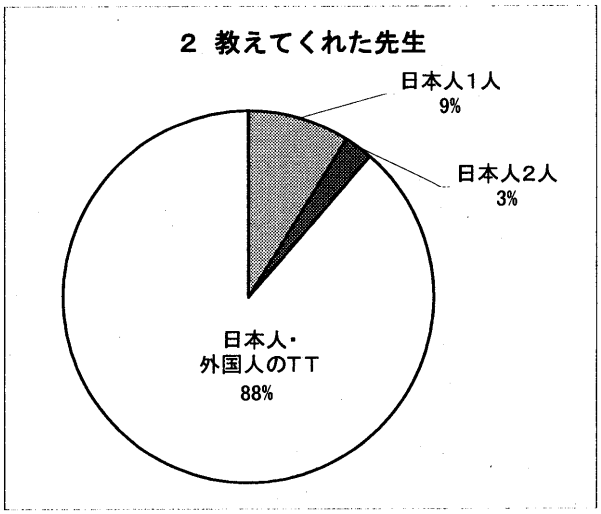
授業中の活動では，「学びの交流」や教師のモデリングやコーチングなどを意識して，表現力以外のいろいろな力（イメージ力など）もからむように展開をしてきた。それらが問題解決力を高めるために有効であったかについても，今後探っていかなければならない。

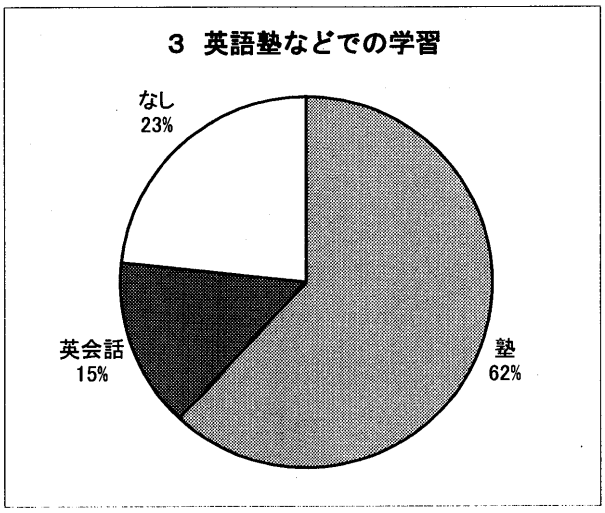
今年度の英語科の実践が，小・中の目標である「確かな学力を持った子どもの育成」につながっているかは，まだまだ検討していかなければならない今後の課題である。

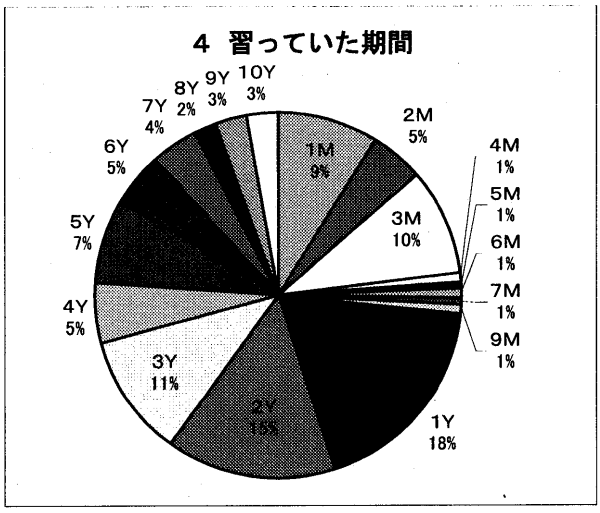
資料１（２００５年度　４月アンケートの結果）

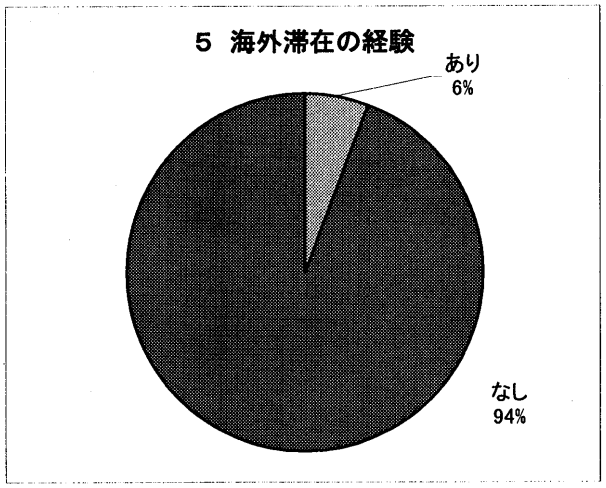
Ａ 小学校時代の英語とのふれあい

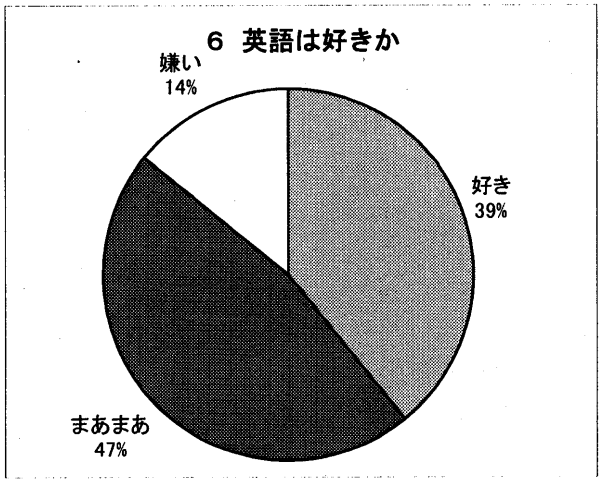




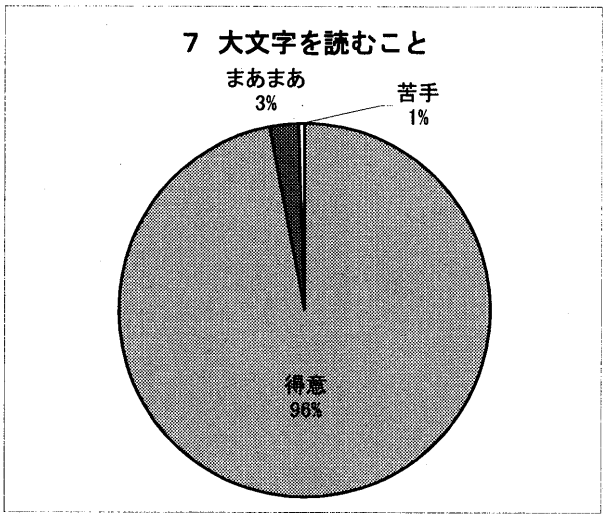


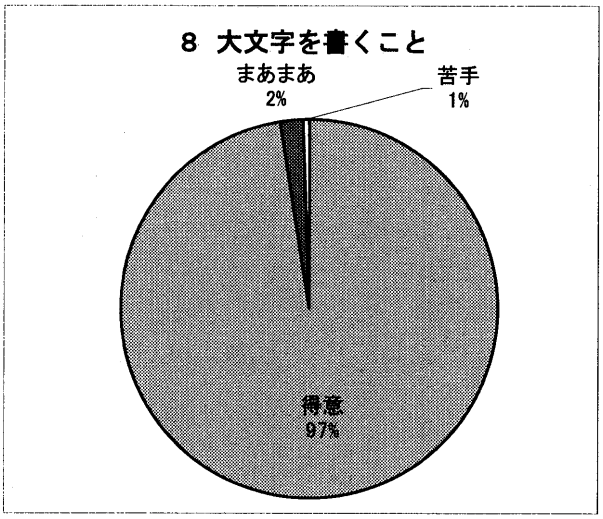


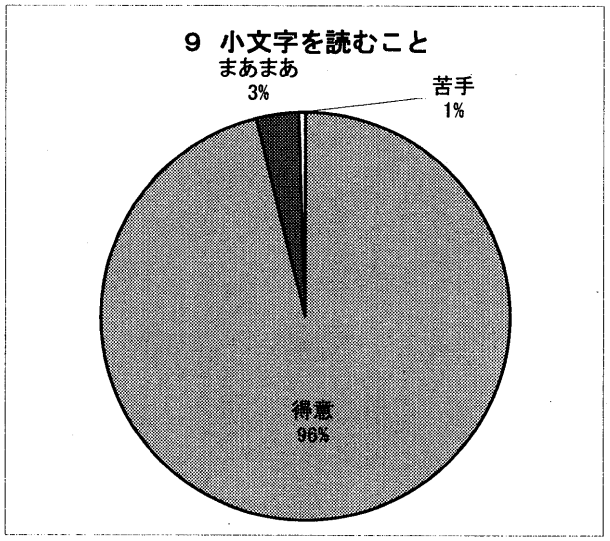


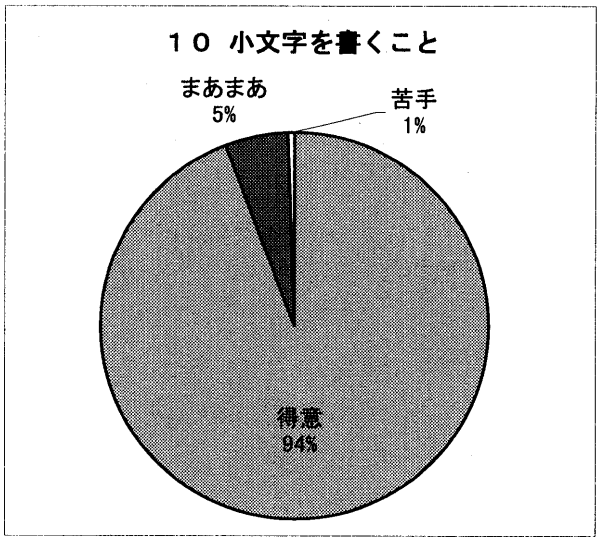


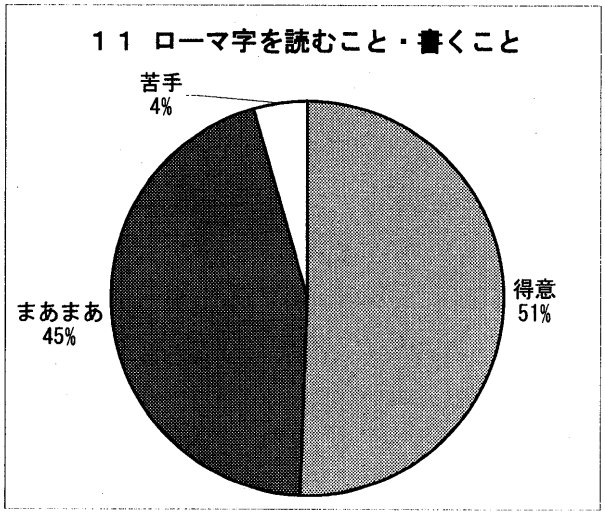
B アルファベットやローマ字



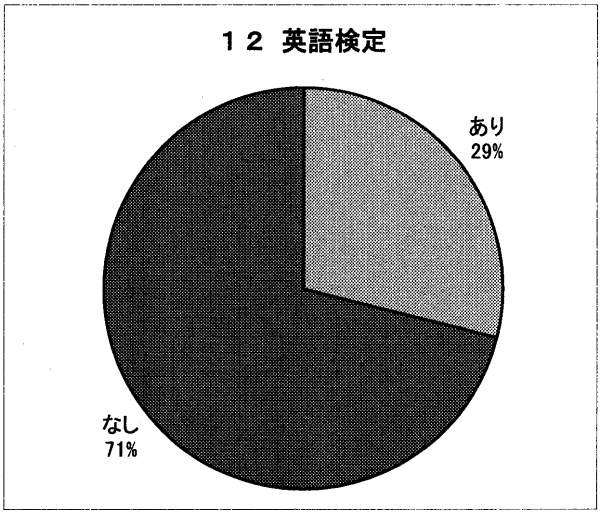


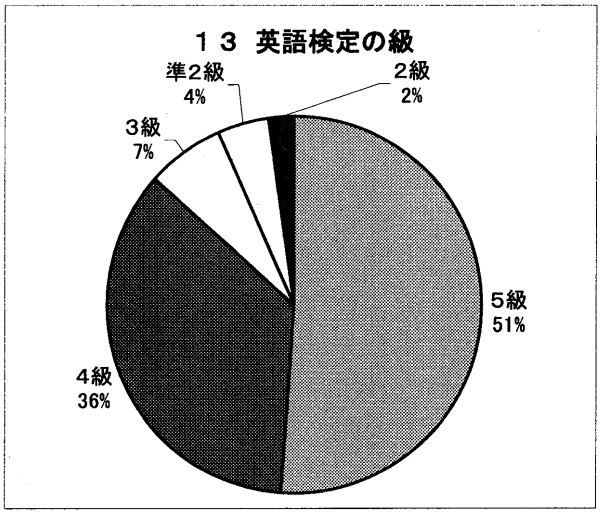






C 英語検定





資料2

Can You Say in English?　　class____no.____name_____

◎心をこめて英語らしく言えますか？

	Japanese 日本語	English 英語	①	②	③	④	⑤	⑥
1	おはよう（ございます）。	Good morning.						
2	こんばんは。	Good evening.						
3	こんにちは。(good)	Good afternoon.						
4	こんにちは。（朝・夕もOK）	Hello.						
5	やあ。こんにちは。	Hi.						
6	ごきげんはどうですか。元気ですか。	How are you?						
7	とても元気です。	I'm pretty good.						
8	元気です。	I'm fine.						
9	あまり元気ではありません。	I'm not so fine.						
10	ありがとう。	Thank you.						
11	ありがとう。（くだけた表現）	Thanks.						
12	どうもありがとう。	Thank you very much.						
13	どうもありがとう。(くだけた表現)	Thanks a lot.						
14	あなたはどうですか。	How about you?						
15	初めまして。お会いできてうれしいです。	Nice to meet you.						
16	こちらこそ、初めまして。お会いできてうれしいです。	Nice to meet you, too.						
17	どちらの出身ですか。	Where are you from?						
18	金沢から来ています。	I'm from Kanazawa.						
19	日本の石川から来ています。	I'm from Ishikawa, Japan.						
20	わたしもです。	Me, too.						
21	名前は何ですか。	What's your name?						
22	私の名は～です。	My first name is ～.						
23	私の姓は～です。	My family name is ～.						
24	どうつづるのですか。	How do you spell it?						
25	（自分の姓のつづり）	M-I-T-A.（自分の姓）						
26	（自分の名のつづり）	K-O-H-E-I.（自分の名）						
26	電話番号は何番ですか。	What's your phone number?						
27	（電話番号は）～です。	It's （自分の電話番号）.						
28	「石」は stone という意味です。	*Ishi* means stone.						
29	わたしは、将棋が得意です。	I'm good at *shogi*.						
30	今、どこにいますか。	Where are you now?						
31	今、北京にいます。	I'm in Beijing now.						
32	そうです。その通りです。	That's right.						
33	こちらは、友達のクリスです。	This is my friend, Chris.						
34	キティちゃんは、かわいいです。	Kitty-chan is cute.						
35	京都は美しいです。	Kyoto is beautiful.						
36	三田先生は、ハンサムです。	Mr. Mita is handsome.						
37	一郎はかっこいい。	Ichiro is cool.						
38	アメリカは大きい。	America is big.						
39	わたしもそう思います。	I think so, too.						
40	わたしはそう思いません。	I don't think so.						

Can You Say in English? 2　　class____no.____name_____

◎心をこめて英語らしく言えますか？

	Japanese 日本語	English 英語	①	②	③	④	⑤	⑥
1	ここがぼくの部屋です。	This is my room.						
2	どうぞ入ってください。	Please come in.						
3	わあ、とてもきれいね。	Oh, it's very beautiful.						
4	これは、何？	What's this?						
5	ブラジルのぼくの家です。	It's my house in Brazil.						
6	リサは、学生ですか。	Is Lisa a student?						
7	はい、彼女は高校生です。	Yes, she is a high school student.						
8	彼女は、フランスのパリにいます。	She's in Paris, France.						
9	フットボールがとても好きです。	I like football very much.						
10	フットボールは楽しいです。	It's fun.						
11	あの、すみません、ブラウン先生。	Excuse me, Mr. Brown.						
12	質問があるんですが。	I have a question.						
13	日本語は話されますか。	Do you speak Japanese?						
14	はい、話しますよ。	Yes, I do.						
15	将棋はされますか。	Do you play *shogi*?						
16	いいえ、将棋はしません。	No, I don't play *shogi*.						
17	タイへ来るのはこれが初めてです。	This is my first visit to Thailand.						
18	あちらは、どなた（誰）ですか。	Who is that?						
19	あれは、ぼくの弟です。	That's my little brother.						
20	弟は、はずかしがりやなんです。	He is shy.						
21	お腹へって、もうだめだ。	I'm hungry. I'm starving.						
22	メロンを買いましょう。	Let's buy a melon.						
23	これは、おいしい。	This is delicious.						
24	それは私の大好きな食べものです。	It's my favorite food.						
25	あなたの大好きな食べものは何？	What's your favorite food?						
26	健と絵美は仲の良い友達です。	Ken and Emi are good friends.						
27	私たちはみんな仲の良い友達です。	We are all good friends.						
28	学校のそうじはしますか。	Do you clean the school?						
29	はい、毎日します。	Yes, we do every day.						
30	日本でも同じです。	It's the same in Japan.						
31	月曜に数学はありますか。	Do you have math on Monday?						
32	サッカー部に入っています。	I am in the soccer club.						
33	いくらですか。	How much is it?						
34	２０ドルです。	It's twenty dollars.						
35	いろいろと、ありがとう。	Thank you for everything.						
36	来てくださってありがとう。	Thank you for coming.						
37	どういたしまして。	You're welcome.						
38	気をつけてね、和也。	Take care, Kazuya.						
39	君もね。	You, too.						
40	良い旅行になるといいね。	Have a nice trip.						
	合計	Total						

資料 3

Small Talk　　Summer [夏]　Vocabulary

	日本語	English	Check
1	泳ぎに行く	go swimming	
2	プール	a swimming pool	
3	海	sea	
4	海岸	beach	
5	日焼け	suntan	
6	お里	hometown	
7	祖父	grandfather	
8	祖母	grandmother	
9	西瓜	watermelon	
10	麦茶	barley tea	
11	宿題	homework	
12	花火	fireworks	
13	お化け、幽霊	ghost	
14	山	mountain	
15	登る	climb	
16	蚊	mosquito	
17	せみ	cicada	
18	ひまわり	sunflower	
19	朝顔	morning glory	
20	暑い	hot	
21	涼しい	cool	
22	蒸し暑い	muggy	
23	冷たい	cold	
24	かゆい	itchy	
25	お墓	grave	
26	7月に	in July	
27	8月に	in August	
28	去年の夏	last summer	
29	夏休みの始めに	at the beginning of summer vacation	
30	7月の下旬に	at the end of July	
31	暑いのが好きだ	I like to be hot	
32			
33			
34			
35			